

かれこれ、これから

ONEOR8公演上演台本

2024年5月31日(金) ～ 6月9日(日)

新宿シアタートップス

登場人物

【住人】

| | |
|----|-------|
| 八田 | 恩田隆一 |
| 花代 | 異儀田夏葉 |
| 葉子 | 岡田帆乃佳 |
| 畑野 | 佛淵和哉 |
| スイ | 金井美樹 |
| 稲尾 | オツハタ |
| 幹彦 | 山科連太郎 |
| ミツ | 小林桃香 |
| 原 | 大城智哉 |
| 茂美 | 小笠原遊香 |
| 弓枝 | 中野亜美 |

【スタッフ】

| | |
|----|-------|
| 玉置 | 富川一人 |
| 小寺 | 田久保柚香 |

【住人の家族】

| | |
|----|------|
| 安食 | 保倉大朔 |
| 結衣 | 富田直美 |
| 住夫 | 山口森広 |

ここは「わかばのいえ」と呼ばれるシェアハウス、舞台はその溜まり場のような場所である。

室内の柱が木や枝になっっているなど、その名の通り「わかば」を思わせるどちらかと言えば抽象的なセット。

複数のテーブルと椅子が配置され、小上がりにはお茶台、花札やランプなどもあり、レクリエーションが行える模様。

上手にはこの建物の玄関にアクセスする通路、下手には住人らの部屋や食堂、正面には散歩のできる庭が広がっている。

テープレコーダーを再生したときに聴こえるようなカセットのノイズ音がする。

それと同時に、小上がりに独り腰掛ける八田の姿が浮かぶ。

八田は何をするわけでもなく庭をボーっと眺めていて……。

八田
……………。

そんな八田の様子を伺いに上手から花代、下手から玉置が姿を現す。

八田は二人がいることに気づいていない様子。

花代
……………。
玉置
……………。

少しして上手下手から次々と住人らがやってくると、八田に質問を投げかける。

八田は住人らにかかずらうことなく。だが質問に答えていく。

花代
さて。今日は何のお話を聞いていきましょうかね。

八田
なんだ。またあんたか。

玉置
ねえ八田さん。昨日は何のお話をしましたっけ？

八田
昨日のことなんて何一つ覚えてないよ。全部忘れた。

小寺
恋愛の話とかいかがです？恋バナしません？

八田 勘弁してくれよ。この年になって恋バナもクソもないだろう。

稲尾 八田さん、ずっとお独りでしたよね？

八田 だったら何だよ？

畑野 結婚しようと思った方はいらっしやらなかったんですか？

八田 いいか？俺は過去を振り返らない男なんだよ。

原 もしかして、おモテになったとか？

八田 お前、いい加減にしろ。

幹彦 モテすぎて、誰か一人に絞ることができなかったんじゃないですか？

八田 おだてたって無駄だよ。恋バナなんて絶対にしないからな。

スイ 八田さん、笑顔がチャーミングですよ。

八田 そうかい？

茂美 女性が放っておかなかったんですね、きっと。

八田 まあ自慢じゃないけど、この歳まで彼女が途切れたことはなかったね。

でもモテたわけじゃないんだよ。もしかしたら、俺のことを好いてくれ

る女はいたかもしれないけど、俺は自分から好きにならないと――

葉子 (遮って) 初めて彼女が出来たのはおいくつですか？

八田 (さらに遮り) まだ話してんだろ！最後まで聞けよ。いいか？俺は自分

から好きにならないとダメなタイプなんだよ。好きな女には猪突猛進。

だけど一つ問題があつてさ、彼女をモノにした次の日から、自分の心が

どんどん冷めて――

ミツ (遮って) その中で一番の恋愛っていつの頃ですか？

八田 (さらに遮り) だから話の途中でしようが！…… (諦めて) え？なに？

なんて質問したの？

弓枝 忘れられない方がいらっしやるとか？だから結婚できなかったみたい

な？

八田 ……忘れられないねえ……まあ、そうだなあ……。

照明変化。

日中の溜まり場へ。

職員である玉木と小寺が新しい入居者である弓枝をみんなに紹介している。

弓枝 これからお世話になります。みなさんどうぞ、よろしくお願い致します。

頭を下げる弓枝。

住人たちからは自然と拍手が湧き上がる。

八田 名前、何ていうの？

弓枝 草村です。

八田 そうじゃなくて、下の名前。

弓枝 弓枝です。草村弓枝。

八田 (呼んで) 弓枝ちゃん。

弓枝 はい？

八田 いやさ、女の人は下の名前で呼ぶのがこのルールでね。

弓枝 あ、そうなんですネ。

八田 俺の名前は――

花代 (遮って) あたし、呼ばれたことありませんけど？

八田 あ？

花代 「あんた」とか「おたく」とか「お前」とか。ひどいときは「ババア」

ってね。花代です。立木花代。

八田 知ってるよ。

花代 弓枝さんに言ったんだよ。

八田 ああ？

花代 よろしくね。ぜひ、「花代ちゃん」って呼んでください。

弓枝 はい。よろしくお願いします。

八田 俺の名前は――

玉置 まあまあまあ。自己紹介は後にしましょう。今、全員の名前覚える

の、大変ですから。

八田 (構わず) 耕一です。八田耕一。どうぞよろしく。(握手を求め)

弓枝 (仕方なく握り返し) ああ、よろしくお願いします。

八田 (握手を離さず) みんなからは「耕ちゃん」って、呼ばれていません。

「八田さん」って呼ばれてます。だけど弓枝ちゃんだけは「耕ちゃん」

って呼んでいいからね。

困っている弓枝を助けようと、玉置が「まあまあまあ」と
言いながら、にこやかに握手の手を引き離してやる。

玉置 はあい。というわけで、今朝は弓枝さんの顔見せですから。自己紹介は
各自各々でお願いします。

住人 はい。

玉置 (弓枝に) 一応ここは応接室と言いますか、お客さんがいらしたときの
客間です。とはいえみなさんが自由に使っていい場所です。ここに
お茶の用意もありますし、トランプとか花札とか自由に遊んでいた
いで。

弓枝 はい、わかりました。

八田 麻雀できる？麻雀。

弓枝 麻雀は、やったことないですね。

八田 面白いよ。今度教えてあげるからね。

弓枝 あ、ありがとうございます。

花代 興味ないならはつきり言ったほうがいいよ。でないところの人、わかんな
いから。

弓枝 ああ。じゃあ……考えておきます。

八田 OK。

玉置 一応、賭け事は禁止です。とはいえ常識の範囲内というか楽しめる
範囲であれば僕らも目をつぶりますから。

花代 この際、禁止にしたほうがいいんじゃない？

八田 は？なんでだよ。

花代 仲間同士で賭けるのは良くないでしょう。現に困ってる人がいるんだ
からさ。

八田 誰も困っちゃいねえよ。なあ？

幹彦 ええ……。

稲尾 まあ……。

花代 思いつきり困ってるじゃないの。

幹彦 そんなことないですよ。

稲尾 楽しめる範囲でやっていますから。

八田 だよな？葉子だって、つまんだら？

葉子 あたしは別に、賭けなくても楽しめるタイプだから。

八田 なんだよ。裏切りやがって。

葉子 ホントよ。ゲームとして好きなのよ、麻雀は。

花代 一応禁止なんじゃなくて、はっきり禁止にしたほうがいいと思うけどね、あたしは。

八田 俺は反対だね。賭けない麻雀なんて、俺の常識からしたらありえない。

花代 八田さんさ、これからどんどん若い人が入ってくるんだよ？あたしらみたいな古株が風紀乱してどうすんのさ。

八田 内輪で楽しくやってんだよ。誰にも迷惑かけちゃいないだろ。

花代 賭け麻雀はダメだって。世の中のルールがそうなってんの。

玉置 まあまあまあ。

八田 一体なんなんだよ。昨日までは良かったのによ。

花代 今日を機につてことよ。弓枝ちゃんが入ってきたんだから。

八田 そうやってすぐ新入りをダシに使いやがって。

花代 あたしがいつダシにしたって言うのよ？

玉置 まあまあまあ。

八田 畑野が入ってきたときもそうじゃん。ここ、禁煙にしたじゃねえかよ。

花代 あのね、それまでここで吸えてたことが奇跡なんだよ。わかんないの？

玉置 まあまあまあ。

八田 うるせえんだよ、なんでもかんでもダメダメって。生きにくくてしょうがねえよ。

玉置 まあまあまあ。

花代 当たり前でしょうよ、みんなで暮らしてんだから。嫌ならここ出てきやいいでしょ。

玉置 まあまあまあ。

花代 玉ちゃんもはつきり言いなさいよ。

玉置 えっ？

花代 賭け麻雀はダメなんだって。「まあまあまあ」言っていないで。

玉置 ……まあまあまあ。

葉子 また「まあまあ」言ってるし(笑)。

玉置 今は、弓枝さんのご紹介の時間ですから。(弓枝に)ごめんなさいね。

弓枝 あ、いえ……。

玉置 (庭を差し) 正面に見えるのが―

花代 それで? どうすんのよ?

玉置 どうするって……?

花代 賭け麻雀を認めるの? 認めないの?

玉置 まあまあまあ……まあ、それは、おいおい……。

花代 (深くため息) ハアア……。

八田 (鼻で笑い) フン。

玉置 (なぜか笑う) ハハ、ハハ、ハハッ。

変な空気が漂う……。

小寺 月に一回のレクレーションもここで行うんです。今月はまだ何するか

決まってるんですけど。

玉置 あ、そうそう。レクレーションもここで。毎月担当が決まってるんです

よ。今月は誰でしたっけ?

原と茂美が手を挙げて、

茂美 あ、私たちです。

玉置 原さんと茂美さんです。ご夫婦で住まわれてて。

弓枝 そうなんです。よろしくお願いします。

原 (にこやかに) よろしくお願いします。

玉置 それで、庭にはここから降りていただいて。正面に花壇が見えると思うんですけど、ガーデンングとかもやってるんでよかったですらご参加ください。

弓枝 はい。

玉置 タバコって吸ったりします?

弓枝 いえ。私は。

玉置 一応お伝えしておく、喫煙所は花壇の向こうにありますから。建物内で唯一吸える場所になります。

八田 昔はここでも吸えたんだけどね。もう嫌になっちゃうよ。夏は暑くて死にそうだし、冬は凍えて死にそうだし。

花代 やめたらいいでしょ。

八田 タバコやめてまで長生きなんかしたくないんだよ。タマキン。

玉置 はい？

八田 もういいよな？一服しに行つて。

玉置 あ、どうぞ。

八田は庭に出るサンダルを履くと、

八田 悪いけど牌積んどいてくれるか。

稲尾 はい。

幹彦 了解です。

八田はタバコを吸いに庭へと去る。

稲尾と幹彦、それから畑野が麻雀の準備を。

玉置 あ、僕、玉置っていうんですよ。

弓枝 ええ。存じてます。

玉置 それじや行きましようか。お部屋と食堂に案内しますんで。

弓枝 はい。(皆に) それでは失礼します。

皆それぞれに挨拶。

玉置が弓枝を連れて、食堂の方へと去っていく。

小寺 これで解散になります。わざわざ集まっていたいただいてありがとうございます。

いました。

すると原の肩を引つ叩く茂美。

原 いて。何だよ？

茂美 ……………。

原 え？なんで叩いたの？

茂美は黙って上手の方へと去る。

原 ？？

花代 デラちゃん。ちよつといい？

小寺 はい？

花代 (手招きし) ちよつと。

稲尾 何かあったの？

原 いや、特には……。

葉子 鼻の下伸ばしてたからじゃない？

原 鼻の下？え？俺が？

葉子 弓枝さん見てずっとニヤニヤしてたよ。ねえ？

ミツ うん。茂美ちゃん、殺すような目で睨んでた。

原 ウソ……。

葉子 追いかけたほうがいいんじゃない？後々面倒なことになるよ。

原 (仕方なく追いかかけ)

葉子 愛されてるねえ(笑)

原 そんなじゃないから。

茂美を追いかける原。

小寺 (花代に近づいて) え？何ですか？

花代 八田さん、ベランダでタバコ吸ってる。

小寺 ええ？

花代 今から部屋、覗いてきてくれない？どっかに吸い殻が残ってるはずだから。

小寺 いやいや。八田さんの許可なくお部屋に入るのは……。

花代 大丈夫よ。そもそもルール破ってんのはあいつのほうなんだし。

小寺 タバコ吸ってるところ、ご覧になったんですか？

花代 ううん。真下から臭ってきたの。

小寺 ああ……。

花代 なによ？その顔。

小寺 いや、臭っただけですか？

小寺 いや、臭っただけですか？

花代 そうだけど。

小寺 あの、それだけだとやっぱり、お部屋には入りづらいなって……。

花代 それだけって重要なことよ。小火でも出してごらんさい。真っ先に煙吸って死ぬのは上に住んでるあたしなんだからね。

小寺 まあそうですけど……。

花代 ちよっと見てきてよ。お願いだから。

小寺 わかりました……。

小寺は八田の部屋を覗きに去る。

花代 え？吸った？誰か、ベランダで。

葉子 あたしは吸ってないけど……。

幹彦 俺も……。

ミツ 私も……。

稲尾 僕も吸ってません。

花代 だよね。あいつしかいないもんね、そんなことするの。

畑野 っていうか僕のせいなんですか？ここでタバコ吸えなくなったの。

花代 「せい」じゃなくて「おかげ」なのよ。畑野ちゃんがタバコ吸う人だったら、あいつは未だにここでタバコ吸ってるからね。

畑野 何だかよくわかりませんが、僕はお役に立てたってことですか？

花代 そういうこと。

畑野 だったらよかったです。ありがとうございます！

花代 なに？今日も賭けるの？

畑野 おそらく。僕は初参加なんでよくわかりませんが。

花代 稲尾さんも幹彦くんもよしなさいよ。別に無理して付き合う必要なんてないんだからさ。

稲尾 ホントに無理してるわけじゃないですよ。

幹彦 レートもそんなに高くないですし。

花代 にしたって、二人とも負けが込んでるんでしょう？

稲尾 それは僕たちが弱いだけですから。

花代 聞いたよ。あの人（八田）、勝つまで続けるんでしょう？負けたままじゃ終わらせてくれないって。

稲尾

花代

稲尾

花代

稲尾

花代

稲尾

花代

稲尾 ああ……。

花代 そりゃあ負けが込むに決まってんじゃないの。

幹彦 え？聞いたって言うのは……？

ミツ ごめん、私が話したの。

幹彦 おミツちゃんが？

ミツ 困るって言ったでしょ？お金取られてばっかりで。

葉子 っていうかあれよね、勝つまで続けるっていうより、負けると明らかに不機嫌になるのよね、あの人。

花代 あーもう目に浮かぶわ。

葉子 あたしは全然気にならないんだけど、二人とも優しいから、八田さんが機嫌よく終われるようにしてあげてるのよ。

花代 どうやって？

葉子 八田さんの手が進むようにわざと鳴かせたり、危険牌だとわかって振り込んであげたりしてるの。

花代 ちよつと何言ってるかわかんないけど。

葉子 要するにね、

花代 要するに、仲間内で賭け事やってんのがやっぱりよくないってことよ。

お金賭けてなきや、あいつだって機嫌損ねることないんだし。

葉子 まあ、そうなんだけど……。

花代 あたしも見てこようかな。絶対吸い殻あると思うのよね。

花代は八田の部屋へと去る。

幹彦 俺そんな話したっけ？おミツちゃんに。

ミツ うん。

幹彦 いつ？

ミツ いつって？覚えてないの？

幹彦 覚えるまでもないっていうか、多分、冗談のつもりで話したことさ。

ミツ え？冗談ぼくはなかったけど……。

幹彦 なんだかんだ麻雀は楽しいし、こんなに大ごとになっちゃうとき……。

ミツ なんかごめんね。告げ口したみたいになっちゃって……。

幹彦 ……。

畑野 まあ大丈夫ですよ。今日から八田さんにカモにされるのは麻雀の弱い僕ですから。

葉子 いいの？八田さん容赦ないですよ。

畑野 大丈夫です。お金はいくらでもありますから（笑）。

葉子 言うねー（笑）。

稲尾 どうしたの？なんかあった？

スイ えっ。

稲尾 今朝からなんか、元気ないみたいだけど。

スイ ああ、うん……。

スイは神妙な面持ちで葉子とミツに、

スイ ……出たの。

葉子 出たって？

スイ ……夕べ、寝てるときに……。

ミツ おしっこ？

スイ 違う。夜中に出たのよ。

ミツ え、まさか……う（んち）

スイ 違う。そっちじゃない。

葉子 え？もしかして、ナメクジ？

スイ ……そう。

葉子 うそ。

ミツ え、ホントに？

稲尾 え、何なの？なに？ナメクジって？

葉子 いや、あたしたちもよくわかんないんだけどさ、夜中にね、足の裏がモゾモゾするような感覚があって目が覚めたのよ。ナメクジ踏んづけたみたいなの。

稲尾 ナメクジ踏んづけたことあるの？

葉子 いやないけどさ。

稲尾 あ、ごめん。

葉子 それで足の裏確認したら、実際に湿ってたってことがあったの。ね？

ミツ うん。私の場合はタコが絡みついてきたような感覚があって。

稲尾 タコに絡みつかれたことあるの？

ミツ いやないけどさ。

稲尾 あ、ごめん。

ミツ おんなじように、目が覚めたら足の裏が湿ってて。

葉子 スイちゃんは？

スイ 私は……誰かに足の裏を舐められてるような感覚だった……。

稲尾 誰かに足の裏を舐められたことあるの？

スイ (睨んで) ……………。

稲尾 あ、ごめん。なんでもない。続けて。

スイ すぐに目が覚めて、絶対に誰かいると思って電気つけたんだけど、誰も

いなくて……。

幹彦 夢じゃない？葉子ちゃんたちの話に影響受けて、そういう夢見ちゃっ

ただけだよ。

スイ 絶対に違う。だって足の裏ビチョビチョだったし。

幹彦 怖い夢見て、寝汗かいたんじゃない？

スイ 違う。だって足元に何かいる感覚があったんだもの。

幹彦 じゃあ幽霊ってこと？

ミツ ちよつとやめてよ。

葉子 え、そつちのほうがまだよくない？誰かに足の裏舐められるより。

ミツ まあ、そうだけど……。

スイ どつちにしろ私、怖くて眠れなくなっちゃって……。

稲尾 一睡もしてないの？

スイ うん。部屋にも戻りたくないの……。

葉子 男性陣は？そういう目に合った人？

稲尾 いやあ聞いたことないね？ある？

幹彦 ないねえ。

畑野 どっか出かけませんか？

スイ え？

畑野 そうだな。なるべく遠いところがいいな。たとえば浅草とか？

スイ 今から？

畑野 もちろん。こういうときは別のことをして忘れるのが一番です。浅草に

美味しいあんみつ屋さんがあるんですけど、そこ行きませんか？

スイ ああ、あんみつ。

畑野 たくさん歩いて足の裏の気持ち悪さを払拭しましょう。浅草寺で邪気をお祓いして、美味しいものを食べて、帰ってきた頃には疲れ果てて、きつとぐっすり眠れるはずですよ。

葉子 いいんじゃない？行ってくれば？今日一日、何もすることがないなら。ああ、じゃあ……。

幹彦 いやいや畑野さん。麻雀は？

畑野 ごめんなさい。今日はキャンセルで。

幹彦 そんな困りますよ。メンツ足りなくなるじゃないですか。

畑野 葉子さん、お願いします。

葉子 あたしもごめん。今から出かけるから。

スイ え、じゃあやっぱいいですよ、私は。

畑野 なに言ってるんですか？麻雀なんかより浅草行くほうがよっぽど大事です。(スイの手を引いて) さあ、行きましょう！

スイ ちよつと待ってください。何の準備もできてませんから。

畑野 (遮って) じゃあ部屋までお付き合いますよ。行きましょう！

スイ お待たせしちゃうかもしれないから、ここで待っていてください。

畑野 (遮って) 部屋の前で待ってますから。行きましょう！

畑野は半ば強引にスイの手を引いて、部屋の方へと去る。

葉子はそれを笑って、

葉子 露骨だなあ(笑)。

ミツ すごいよね。

葉子 あんな風に生きられたら、あたしの人生も変わったのかなあ。

ミツ なに？どうしたの？

葉子 ううん。別に。あたしも出かける準備しようっと。

葉子は自室へと去っていく。

稲尾 参ったなあ。どうしようか、メンツ。

幹彦 そんなことよりいいの？

稲尾 え？

幹彦 いや、「え？」じゃなくてさ。

稲尾 ああ、うん……。

幹彦 それこそ、麻雀より大切なことがあるじゃん。

稲尾 いや、もういいんだよ、俺は。

幹彦 また。そういうこと言って。

稲尾 それに変じゃん。俺も浅草行くとかって。

幹彦 何だよ？行ったらいいじゃない？

稲尾 畑野さんに悪いよ。

幹彦 なんで畑野さんのこと気にするのよ？

稲尾 だって、きつと二人きりで行きたいでしょ。

幹彦 それを阻止するために行くんじゃない。

稲尾 八田さんと麻雀の約束しちゃったし。

幹彦 それをほっぽらかして畑野さんは行くんだよ？どうせメンツ足りない

んだしさ、稲ちゃんも浅草行きやあいんだよ。

稲尾 うーん……。

幹彦 ちゃんとスイちゃんにアピールしたほうがいいって。遠くから見てる

だけなんていい加減よしなよ。気持ち悪いよ。

稲尾 気持ち悪いは言い過ぎだろ。

幹彦 気持ち悪いよ。ねえ？

ミツ うん。気持ち悪い。

稲尾 何よ、おミツちゃんまで。

ミツ 行つたほうがいいよ。稲尾さんも、浅草。

稲尾 ……。

ミツ きつと勝負に出るよ、畑野さん。

稲尾はポケットの小銭を確認すると、

稲尾 ちよつとタバコ買ってくる。

幹彦 稲ちゃん。

稲尾は構わず、上手を去っていく。

幹彦 うーん……。

ミツ ……メンツ足りたいの？麻雀。

幹彦 まあ、3人でもできるけど……。

ミツ 私入ろうか。教えてよ、麻雀。

幹彦 いいよ。そんなすぐに覚えられるもんでもないからさ。

ミツ ……なんか怒ってる？

幹彦 いや。怒ってないよ。怒ってない。

ミツ そう？なんか、変な感じだけど……。

幹彦 ……俺、ホントに話したの？賭け麻雀がどうのって。

ミツ だからごめんって。花代さんに話したのが間違이었다。

幹彦 ……。

ミツ ……。

幹彦 稲ちゃん、浅草行ったほうがいいよね？

ミツ 私はそう思うけど。

幹彦 ちよつと、説得してくるわ。

幹彦は稲尾を追いかけて去る。

一人残ったミツ。何となく幹彦について行けず、

ミツ ……。

そこへタバコから戻ってくる八田。誰もいないことに、

八田 えっ……ええ……？？

ミツ 今日は、麻雀やらないみたいですよ。

八田 は？なんで？

ミツ やるかもしれませんが。

八田 (コケて) なんだよ。

ミツ ちよつとよくわかりません。

ミツはタバコを出しながら庭へ出ようとする。

八田　なあ、おミツ。

ミツ　はい？

八田　お前も麻雀覚えなないか？同じメンツじゃ飽きちやってさ。
ミツ　ごめんなさい。私、麻雀興味ないんで。

そう言い残し、ミツは庭へと去っていく。

八田の視線はミツを追いかけ、庭へ。

するとまたレコーダーのノイズ音がする。

上手下手からやってくる安食、結衣、住夫。

三人の登場に八田は気づいていない。

安食　その方とはどうやって出会ったんですか？

八田　出会いはそうね、昔、一時期、下宿してたんだけどさ、向こうが先に
住んでて。

結衣　第一印象はどんな感じだったんですか？

八田　そりゃああれだよ……ちよつと待て。結局口車に乗ってねえか？

住夫　どちらの方から好きになったんですか？

八田　馬鹿野郎。だから喋らねえって言ってんだろ。

安食、結衣、住夫が消える……。

照明変化。夕方。

買い物用のカートを引いている花代と、買い物かごを下げた
弓枝が帰ってくる。

八田　おかえり。

花代　ただいま。

八田　お前に言っただけよ。

花代　わかってるわよ。

八田　だったら応えんじやねえよ。

花代　応えちまうんだよ、「おかえり」って言われると。

八田　お前の「ただいま」なんか聞きたかねえんだよ。

花代 あんたにも「おかえり」なんて言われたかないよ。
弓枝 フッフ。仲良いですね、お二人とも。

「仲良い」と言われ、喧嘩する気を無くす八田と花代。
弓枝は買い物かごを置いて、

弓枝 はあ！疲れたあ！

花代 お疲れさま。

弓枝 花代さんの言う通り、カートは必須ですね。

花代 でしょう？行きしなはいいいんだけどさ、帰りはなだらかな坂道を登ってくることになるからね。

弓枝 地味に、足腰にきますね。

花代 若い人が何言ってるの。

弓枝 お茶にしませんか？部屋のダンボールまだ整理してないんで、お茶も淹れられなくて。

花代 ああ、いいよ。（お茶を淹れようとする）

弓枝 （ので）あ、やらせてください。覚えたいので。これ（お茶台）使っていないんですよね？

花代 そうそう。

弓枝 耕ちゃんも飲みますか？

八田 え？

弓枝 え？

八田 え？耕ちゃん？

弓枝 あ、違いましたっけ？

八田 いや合ってる合ってる。耕ちゃん耕ちゃん。

弓枝 あ、なんだ。よかった。

八田 いやあホントに呼んでくれると思わなかったからさあ参っちゃうなあ。
花代 鼻の下伸ばしてんじゃないよ。

八田 入ってくるんじゃないよ。うるせえな。

ここへ原と茂美が下手からやってくる。

どことなく居心地の悪そうな原。その背中を押す茂美。

原 (弓枝に) あ、こんにちは。
弓枝 こんにちは。
原 いや、もう、こんばんはかな。こんばんは。
弓枝 こんにちはですね、まだ。
原 そうだよね。こんにちは。
弓枝 こんにちは。
原 そうだよね。まだ明るいもんね。
弓枝 明るくはないですね。日が沈むまではこんにちははかなって。
原 そうだよね。こんにちはだよね。
弓枝 そうですね。
原 そうだよね。日が長くなってきたもんね。
弓枝 それは関係ないですね。日が沈んだかどうかなんで。
原 そうだよね。こんにちはだよね。
弓枝 そうですね。
原 そうだよね。つまりこんばんはになるっていうのは――
茂美 どうでもいいわ。こんにちははだろうがこんばんはだろうが。
原 わかってるよ、アイドリングだよ。
茂美 「そうだよね」じゃないのよ。いつまでもアイドリングなんかしてないでさっさと先に進みなさいよ。
原 わかってるってば。
茂美 ごめんなさいね。うちの人から、ちよつと話があつて。
弓枝 話？
原 ……いや、あのね、今朝、弓枝さんのことを見て僕がニヤニヤしていたのは、僕が弓枝さんに好意を抱いていたわけじゃなくて、初対面だから笑顔を振る舞っていただけですから。
弓枝 ああ、はい。
原 僕には大切な妻がいますし、妻以外は目に入りませんので。
弓枝 ああ……。
原 そういうことなんで。申し訳ない。さよなら。
茂美 ごめんなさいね。こんなの別に、わざわざ言うことじゃないんだけど。
弓枝 びっくりしました。告白もしていないのに、いきなりフラれて。

原 そうだよね、ごめんね。

茂美 ちよつと宣言させておきたかったの。この人、前科があるからさ。

弓枝 前科？

茂美 浮気のね。

八田 へえ。

花代 そうなんだ。

茂美 そうなんですよ。しかもその女、弓枝さんにそっくりで。

原 そんなことないよ。

茂美 そんなことあるでしょうよ！あたしあの顔頭にこびりついてんのよ！

原 (迫力に圧倒され) そ、そうなの……？

茂美 この人に口説かれたら、速攻あたしに教えてくださいね。

弓枝 大丈夫ですよ。私、不倫だけは絶対にしませんので。

原 僕だって、絶対に口説いたりしませんから。

八田 弓枝ちゃん。俺、独身だからね。戸籍真っ白。

花代 その歳になるまで戸籍真っ白ってのは異常よ。

八田 うるせえな。またその話かよ。

花代 大体ね、歳取れば取るほど、誰かのために生きるってのが人としての常でしょう？家族のため、子供のため、社会のため、世の中のためってね。

つまり一度も結婚してないってことはよ、自分のためだけ、何の責任も負わずにこの人は生きてきたってことなのよ。やむにやまれぬ事情があつて結婚しない、もしくはできないんなら仕方ないけどさ、この人は

親からもらった財産で、自由気ままに、何の不自由もなくここまで生きちゃったんだから。そんな人と一緒になつたって振り回されるだけよ。

八田 (あくびして) はいはい、わかりましたよ。

花代 あんたに言ってるんじゃないのよ。あたしは(あくびして)弓枝ちゃんに言ってるの。

弓枝 あ。あくびが移った。

八田／花代 え？

弓枝 あくびが移る関係って、前世で繋がりがあつた人みたいですよ。

茂美 へえ。

弓枝 しかも密接な関係っていうか、大切な間柄だったんですって。

茂美 八田さんと花代さんが(笑)。

原 そう考えたら面白いね（笑）。

八田 まさか。そんな話聞いたことないよ。

弓枝 間違いないです。先生が言ってたんで。

八田 先生？

花代 弓枝ちゃんさ、そんなことより聞いてた？あたしの話。

弓枝 はい？

花代 あんな男に振り回されちゃダメよって。

弓枝 ごめんなさい。お茶に集中して何にも。

花代 あ、そう……。

弓枝 （お茶を）どうぞ。

花代 ありがとう。

弓枝 （八田にお茶を）どうぞ。

八田 ありがとう。

ここへ玉置が下手からやってくる。

弓枝 （原と茂美に）今、淹れますね。

茂美 あ、大丈夫よ、あたしたちは。ありがとうね。

玉置 （お金を渡し）お待たせしました。

八田 （数えて）はい、確かに。じゃ便所行ってくるから、これ（麻雀）片付

けといてくれるか。

玉置 わかりました。

八田 あ、そのお茶は飲むなよ。弓枝ちゃんが俺に淹れてくれたお茶だから。

玉置 はい。

八田は下手を去り、玉置が麻雀牌を片づけ始める。

弓枝 タマキンさんも飲みますか？お茶。

花代 いや弓枝ちゃん。弓枝ちゃんは、言わないほうがいいんじゃないかな。

タマキンとか。

弓枝 だってあだ名ですよね？

花代 呼んでるの、あいつだけだから。

弓枝 ……あらやだ。急に恥ずかしくなってきました。

玉置 あ、でもなんか嬉しかったです。ありがとうございます。そしてお茶は結構ですんで。

花代 てか、何で玉ちゃんが麻雀やってるのよ？

玉置 僕だって、やりたくてやってたわけじゃないんですよ。仕事です、仕事。聞いたことないよ。賭け麻雀が仕事だなんて。

玉置 いやいや。ある意味、花代さんのせいなんですよ？

花代 あたしの？

玉置 今朝の、タバコ事件あったじゃないですか。あれで「お前ら職員は俺を犯人扱いするのか」って、八田さんが。

花代 絶対あいつだよ。あいつに決まってる。

玉置 けど吸い殻も、吸ってる証拠も出なかったわけじゃないですか。

花代 だからって、それと麻雀とどう関係があるのさ？

玉置 いやだから「タマキンが麻雀入るなら、今朝のことは水に流してやる」って。

花代 全く、どうしようもないね、あいつは。この際、麻雀そのものを禁止にしましょ。麻雀やりたきゃ表でやってくればいいんだよ。

弓枝 花代さん、笑顔笑顔。

花代 え？

弓枝 お茶飲んで心を落ち着けてください。花代さんの笑顔は本当に素敵なのに、怒ってばかりじゃもったいないですよ。

花代 あいつのことになると、眉間に皺が寄っちゃうのよ。

弓枝 前世ではきつと、ご夫婦とか恋人同士だったのかもしれないね。

花代 あいつと？

弓枝 だから八田さんのことが気になってしょうがないんですよ。

花代 申し訳ないけど、あたしは前世とか輪廻転生とかは一切信じないのよ。死んだら死にきり。それ以上でもそれ以下でもないと思ってるの。

ここへ小寺が電話の子機を手には下手から入ってくる。

小寺 あれ？八田さんは？

玉置 トイレ行ってるけど。どうしたの？

小寺 いや、なんか、お電話が……すぐ戻ってきますよね？

花代 いいや。まだ戻らないってことは多分うんこだよ。八田さん、うんこ出始めたらしばらくトイレから出て来ないよ。

小寺 そっか。どうしようかな……。

弓枝 何でも知ってるんですね。八田さんのこと。

花代 ……。

小寺 (受話器に) あ、もしもし。お待たせしてすみません。今なんか、おトイレに入っけいらっしやるみたいで……。

と言いながら小寺は去る。

花代 ごちそうさま。じゃあたし部屋に戻ります。

弓枝 ありがとうございます。ご案内していただいて。

花代 いいえ。それじゃあまた明日。

皆「おやすみなさい」「また明日」などと挨拶。

花代はお茶のコップを棚に戻すと、カートを引いて部屋へ。

玉置 原さん。レクリエーション、何するか決まりました？

茂美 ごめんなさい、まだ。もうすぐだよ？

玉置 小道具とか買い揃えるようなものがなければ、別にいつでもいいですよ。

原 (弓枝に) 何かしたいことありますか？

茂美 ちよつと！

原 普通に聞いているだけだよ。こんなのもダメなのかよ。

弓枝 レクリエーションって何するんですか？

茂美 みんなでゲームとか。運動不足になりがちだから、当日晴れてたら庭に出て(あくびして)ボール遊びとかできたらいいなって。ねえ？

原 ボッチャとかね。

弓枝 ボッチャ？

茂美 ねえ。

原 え？なに？

茂美 あたし、今あくびしたんだけど。

原 ああ。したね。

茂美 え、しないの？

原 え？

茂美 しないの？っていうか出ないの？移らないわけ？あくび。

原 ああ……移らなかったね……。

茂美 ……。

茂美はショックのあまり下手へと去る。

原 おい茂美。ちよつ待てよ。

原が追いかけるのと入れ違いで、戻ってくる小寺。

小寺 え？どうしたんですか？茂美さん。

玉置 さあ。

小寺 なんか泣いてるっぽかったですけど。

玉置 え？マジ？

弓枝 フフフ。可愛い。茂美さん。

玉置／小寺 ？？

弓枝 お庭でレクリエーションしたりもするんですね。

玉置 そうですね。運動系のレクリエーションは。

弓枝 (発音良く) レクリエーションです。

玉置 はい？

弓枝 レクリエーションじゃなくて(発音良く)レクリエーション。

玉置 レクリエーション……。

弓枝 そそ。フフフ。

弓枝は笑顔のまま、庭へ去っていく。

小寺 ……なんか、不思議な人ですよね。

玉置 え？レクリエーションなの？レクリエーションじゃなくて。

小寺　　そうですよ。

玉置　　何だよ、早く教えてよ。俺ずっと「レクレーション」って言ってたじゃない。

小寺　　それもまあ可愛いかなって。

玉置　　いや、可愛いって……。

小寺　　レクレーションの方が言いやすいし。

小寺はあたりを気にし、玉置に何やらアプローチ。

玉置は何気なく、それをかわして……。

玉置　　まあまあまあ。

小寺　　……。

玉置　　で？何だったの？さっきの電話。

小寺　　いや、なんか八田さんの息子って人から電話かかってきて。

玉置　　息子？息子さんいるの？八田さん。

小寺　　それ確かめようと思ったんですけど、トイレだっていうから。

玉置　　それで？

小寺　　一応、連絡先は聞いて「こちらから折り返します」って……。

玉置　　え、ほんとかな？それ。

小寺　　わかりませんが、もし息子さんだとしたら事件ですよ。

玉置　　事件だね。それは相当。

ここへ庭から幹彦とミツが慌ててやってくる。

玉置　　え、どうしたんですか？

小寺　　走ったら危ないですよ。

幹彦　　稲ちゃん、帰ってきた。

ミツ　　タバコ吸ってたら、一人で帰ってくるのが見えて……。

玉置　　一人で？

上手から稲尾が帰宅してくる。

どことなく寂しげ。皆はそれを悟って優しく「おかえり」と声をかける。

稲尾
ただいま。

稲尾はなぜか「うんうん」と頷き、自室へと帰ろうとする。

幹彦 (ので) ちよいちよいちよいちよい。どうだったんだよ？
稲尾 どうって？

幹彦 行ってきたんだろ？浅草。

稲尾 ああ。

幹彦 で？どうだったんだよ。

稲尾 ……麻雀は？

幹彦 玉ちゃんとおミツちゃんが入ってくれたよ。

稲尾 おミツちゃんが？

ミツ 私は役を覚えるのに手一杯で。みそつかすにしてみました。

玉置 僕の一人負けです。接待麻雀を打たせていただきました。

稲尾 そうか。二人とも、ありがとうな。

ミツ ううん。

玉置 いえ。

稲尾がまた自室へ帰ろうとする。

幹彦 (ので) ちよいちよいちよいちよい。何だよ？どうしたんだよ？

稲尾 ……。

幹彦 玉ちゃんとおミツちゃんが、稲ちゃんのために麻雀変わってくれたんだぞ。二人にも説明する義務があるだろう？

稲尾 ……。

幹彦 デラちゃんだって、稲ちゃんのこと応援してくれてたじゃないか。

小寺 (心配そうに頷いて) ……。

稲尾 ……俺も麻雀やったらよかったよ。

幹彦 どう言うことだよ？

稲尾 ……………。

玉置 稲尾さん。野暮なこと聞くようですけど、なんで一人なんですか？

稲尾 ……………。

玉置 畑野さんとスイさんは？一緒じゃないんですか？

稲尾 ……参ったよ。

幹彦 なにが？

稲尾 ……あんみつ屋でさ、三人であんみつ食ってたんだけど、畑野さん突然、ガシャーンって音立ててスプーン置いてさ、スイちゃんに真面目な顔して「話があるんだけど」って。俺いるのにだぜ？

スイ ウソでしょ？

稲尾 畑野さん、俺なんか見えてない感じでき、スイちゃんに向かって「僕と真剣にお付き合いしていただけませんか？」って言って…………。

幹彦 それで？

稲尾 そしたらスイちゃんが、畑野さんの目をしっかり見てさ、「こちらこそよろしくお願いします」って。俺いるのにだぜ？

幹彦 稲ちゃんは？どうしたんだよ？

稲尾 「おめでどう」って言ったよ。言うしかないだろう。俺、目の前にいるんだから…………。

玉置 なんか、胸が苦しい…………。

幹彦 二人は？なんて？

稲尾 無視だよ。二人だけの世界に入っちゃってさ…………。

小寺 ヤバイ。私泣くかも…………。

稲尾 午後からは何の記憶もないよ。あんみつの味もすっかり忘れた。

ここへ畑野とスイが帰ってくる。

畑野は堂々と、スイはどことなく恥ずかしそうに…………。

スイ ただいま…………。

畑野 ただいま戻りました！

皆、微妙な感じの「おかえりなさい」を口々に…………。

畑野 玉置さん。

玉置 あ、はい？

畑野 あとでいいですか？ちょっとお話ししたいことがあって。

玉置 あ、わかりました……。

稲尾 畑野さん。スイちゃん。

畑野 はい？

スイ え？なに？

稲尾 いや俺さ、二人のこと、もうみんなに話しちゃって……。

スイ ええ？

畑野 もうですか？

稲尾 ごめんね。なんか俺も嬉しくなっちゃってさ、つい口が滑った（笑）。

畑野 なんだあ、参ったなあ（笑）

稲尾 ごめんね。スイちゃん（笑）

スイ いや、別にいいんだけどさ、もう（笑）

稲尾 ごめんごめん（笑）

小寺が泣いている。

畑野 まあ、それなら話が早いです。玉置さん。

玉置 はい？

畑野 今日から、スイさんを私の部屋に住まわせてもいいですか？

玉置 え？今日から？

畑野 はい。なんか昨日、ものすごく怖い目に遭ったらしくて。

玉置 何ですか？怖い目って。

ミツ 前に話したじゃないですか。タコに絡みつかれたって、あれ。

玉置 ああ、はいはい。

畑野 もしかしたらスイさんの夢かもしれません。いや幽霊の仕業なのかもしれない。そう考えるとスイさんは部屋にいれないんだそうです。

玉置 ……いや、あのですね、ご事情はあれなんですけど、同部屋ということになると、原則、ご夫婦でないと無理でして。

畑野 え、お付き合いしてるんですよ？

玉置 すみません。ご夫婦でないと……。

畑野 え、お付き合いしてるんですよ？

玉置 すみません。ご夫婦でないと……。

畑野 ちよつと納得いかないんですけど。

玉置 すみません。お気持ちはわかるんですけど、規則なので。

畑野 ……………。

スィ 畑野さん。大丈夫。ちゃんと自分の部屋戻るから。

畑野 ダメだよ。もう嫌でしょ？あんな怖い思いするの。

スィ 多分、夢だから。幹彦くんの言う通り。ね？

幹彦 いや、わかんないけど……。

スィ 大丈夫大丈夫。ちゃんと部屋に戻るから。玉ちゃん困らせないで。

畑野 ……わかった。じゃあ僕も一緒に行くよ。(手を差し伸べる)

スィ (畑野の手を握り) ありがとう。

夕暮れを告げる夕焼け小焼けのチャイム。

そこへ弓枝が無邪気に口ずさみながら庭から戻ってくる。

弓枝

夕焼け小焼けで日が暮れてー 山のお寺の鐘が鳴るー

お手々つないでみな帰ろー からすと一緒に帰りましょうー

歌に合わせ、畑野とスィが手を繋いで部屋へと戻っていく。

弓枝は買い物かごとコップを棚にしまって、

弓枝

それじゃあみなさん、ごきげんよう。

弓枝は部屋へと帰っていく。

稲尾

(歌って) お手々つないでみな帰ろー からすは遠くで見てるだけー

ミツ

稲尾さんはからすなんかじゃないよ。

稲尾

(髭を触って) からすつぽくないかい？

ミツ

からすなんかじゃない。どっちかって言ったら××だよ。

稲尾

そうか。××か……。

小寺の手にしていた子機が鳴る。

小寺 (出て) はいもしもし。「わかばのいえ」でございます……ああ、はい、すみません。まだ、トイレから出ていらっしやなくて……え？今ですか？……いや、あのですね、ご本人の確認が取れないと面会はできないと言いますか……基本的にはご予約いただかないと建物内に入ることはいけませんよ……？……あ、もしもし……あ、もしもし……あ、もしもし……あ、もしもし……(切って)。
玉置 どしたの？
小寺 いや、あの、さっき電話かかってきた人から、

上手から葉子と住夫の音がする。

葉子 (声) え、ちよつと！何ですか？！
住夫 (声) ごめんなさいごめんなさい！怪しいものじゃないんです！
葉子 (声) 玉ちゃーん！玉ちゃーん！
住夫 (声) ホントにごめんなさい！何もいけませんので！

玉置は逃げ腰、小寺が立ち向かう。
葉子が上手から慌ててやってくる。

葉子 ちよつと！玉ちゃん！
玉置 え、え、え、え、ちよつ何ですか？
小寺 え？何ですか？どちらさまですか？

パンパンの鞆を背負う住夫は、一目でわかる独特の雰囲気。

住夫 驚かせてごめんなさい！本当に何もいけませんので！
葉子 あたしのこと利用して、オートロック入ってきたのよ。
小寺 はい？！
住夫 いや違うんです！先ほどお電話した坂本です！坂本住夫！
小寺 坂本さん？！

住夫
こちらに住んでる八田耕一の息子です！父に会いたくて、すみません、無理に入ってしまった。お許しください。

ここへ八田が戻ってくる。

小寺
あ、八田さん！

八田
あ？

小寺
こちらの方、どなたかご存知ですか？

八田
（まじまじと見て）……いいや。

小寺
どちらさまですか？！

八田
誰だ？お前？

住夫
住夫です。住夫。

八田
……住夫？

住夫
坂本住夫です。

八田
……住夫か？

住夫
住夫です。

八田
……住夫か？

住夫
住夫です。

八田
……住夫か？

住夫
（食って）住夫です。

八田
……住夫か？

住夫
（同時に）住夫です。

八田
……す

住夫
（追い越す）住夫です。

八田
……。

住夫
……お父さんですか？

突然、涙をこぼす八田。号泣しながら跪いて、

八田
すまん！住夫！すまん！

溶暗……。

住夫そしてこれから登場する畑野の娘である結衣、それからスイの息子である安食は、それぞれの親よりかなり年上の俳優が演じる。

冒頭に、ここは「シェアハウス」と書いたが詳しくは「(介護などの)サービス付き高齢者向け住宅」。

住人を演じる俳優の年齢は若いが皆、高齢者の役である。

前場から数日後。

神妙な面持ちで座っているスイ。

少しして、部屋のほうからやってくる小寺。

小寺 すみません、お待たせしちゃって。

スイ ううん。

小寺 息子さんは？

スイ 今、タバコ。

小寺 …… (神妙に頭を下げ) 本当にごめんなさい。

スイ いいのいいの。あの子、すごいヘビースモーカーでずっと吸いたかったはずだから。

小寺 あ、いや、そういうことではなくて……。

スイ え？

小寺 本来なら、ご家族だけで話すべきことなのに……。

スイ ああ……。

小寺 私たちが波風を立ててるというか、事を荒立ててるのは間違いないと思うので。

スイ デラちゃんたちには報告の義務があるんでしょう？仕方ないよ。

小寺 すみません。私たちもみなさんをお預かりしてる立場なので、それだけ

ご理解ください。

スイ もちろん。わかってるよ。

小寺 だけど、こちらが融通利かせたら、こういうことにはならなかったかもしれませんし。

スイ でも規則は規則だから。

そこへ話を聞いていた様子の葉子が下手から登場。

小寺 そうなんですけど、一時的に許可出したら、畑野さんだって……。
スイ 気にしないで。デラちゃんたちの対応は間違ってる。正しいことしたんだから謝らないですよ。
小寺 ありがとうございます。(タバコ場を気にしつつ) じゃあなるべく早く戻りますので。
スイ うん。

小寺はいそいそと下手へと去る。

葉子はお茶を淹れつつ、

葉子 息子さん、何だった？
スイ 何だった？ってご想像の通りよ。
葉子 まあそうよねえ……展開早すぎだよねえ……。
スイ 早すぎたね(笑)。おかげで熱くなっちゃった。
葉子 熱くなつた？
スイ 熱くなりすぎで、のぼせちゃったのよ。
葉子 ……………。
スイ 子供の顔見て、やっと冷静になれたわ。
葉子 のぼせたらダメなの？
スイ え？
葉子 のぼせてるスイちゃん、可愛かったけどな。
スイ 可愛いだなんて、そんな歳でもないでしょ。
葉子 歳なんて関係ないよ。
スイ ここではね。この中にいければ関係ないけど……家族とか世間からしたらやっぱり関係あるのよ。それがよくわかった。

ここへ庭から安食がやってくる。

葉子 こんにちは。
安食 こんにちは。ご無沙汰してます。

葉子 こちらこそ。

安食 すみません。母がお騒がせしてるみたいで……。

葉子 お騒がせだなんて、そんな。

安食 なんて言ったらいいか……本当、お恥ずかしい限りです。

葉子 そんな風に思わないで。身内からすれば恥ずかしいことかもしれないけど、恋愛なんてここじゃ普通のことなのよ。

安食 ……。

葉子 お茶飲まない？職員さんたちが来るまでの間。

安食 ああ。じゃあいただきます。

葉子 (お茶を出し) どうぞ。

スイ ありがとうございます。

安食 ありがとうございます。

葉子 本当はお酒出したいくらいだけど。あたし昔スナックやってて。

安食 そうなんですか。

葉子 小さいお店だけどね。相談乗るのは得意な方よ。お金のこと以外は(笑)相談なんて別にありませんので。

葉子 ……やっぱり、母親の恋愛なんて見るの嫌？

安食 嫌っていうより、夢にも思わなかったとか考えもしなかったです。

葉子 スナックとかは行くの？普段。

安食 ？？私ですか？

葉子 うん。

安食 行かないですね、ほとんど。

葉子 キヤバクラとか、ガールズバーとか？

安食 も行かないですね。毎晩、晩酌です。

葉子 奥さん、付き合ってくれるの？

安食 妻は寝ちゃいますね、子供たちと一緒に。

葉子 じゃあセックスレスだ？

安食 はい？

葉子 どこで発散してるの？

安食 発散っていうのは……？

葉子 仕事から帰ったら一人で晩酌、休みの日は家族サービスでしょう？男としてのフラストレーションが溜まる一方じゃない？浮気してる？

安食 いやしてないですよ。

葉子 じゃあそういうお店に行ってるとか？

安食 いや行つてませんよ。え？何なんですか？

葉子 お母さんもね、そういうことは考えてこなかったと思うの。

スイ え？私？

葉子 考えたことある？息子さんが浮気してるとか、そういうお店に行つてるとか。

スイ 考えたことないけど……。

葉子 でしょう？身内のさ、そういう性の部分つてあまり考えないし、考えたくもないじゃない？でもさ、絶対にあるんだよ、絶対にあるの。

安食 まあ、わかりますけど……。

葉子 だから恥ずかしいことかもしれないけど、恥だとは思わないでほしい。人間なんだから普通のことよ。

安食 はい……。

少し間。

葉子 歳取るとき、

スイ え、まだあるの？

葉子 性欲つて無くなると思うでしょう？それがなくならないのよ。出来るとか出来ないとか体力的な問題は置いてよ、エロいことは考えるし、いつまで経つてもそういう行為がしたいとは思うのよ。ねえ？

スイ 私に振らないでよ。

葉子 スイちゃんの話してるのよ。

スイ だとしたらいいよ、もう話さなくて。もう充分だから。

葉子 さつきね「熱くなりすぎてのぼせた」って言ったのよ、お母さん。それつて火照つたつてことでしょうか？体が。

スイ やめてよ。もう充分だつてば。

葉子 恥ずかしいがることないじゃない。

スイ 恥ずかしいよ。恥ずかしいに決まってるでしょ。

安食 おっしゃってる意味はわかります。身内だからこそ、考えもしたかった部分だと思います。でも、結婚となれば話は別です。正直、今回のこと

で私は母のことがわからなくなりました。亡くなった親父にだって顔向けができません。

……。

スイ

ここへ玉置と小寺が下手からやってくる。

玉置

ごめんなさい。お待たせしました。

小寺

すみません。

安食

いえ。

玉置

えーつとですね……結論から申し上げますと、今日の、畑野さんとの、ご面会は……しないほうがいいかなと思っています。

安食

どうしてですか？

玉置

いや、まあ、その、今日じゃないほうが、あれかと、思いまして。

安食

だから、どうしてですか？

玉置

まあ、何とかですかね、何とも言えないんですけど、何かとも言えないと言いますか……。

安食

結婚する気なんですか？その意思は変わらないと？

玉置

まあ、結論から申し上げますと、その、ようですね。

スイ

……。

安食

畑野さんの、身内の方もいらしてるんですよね？

玉置

いらっしやってますね。

安食

できれば今日、話したほうがいいと思うんですけど。

玉置

ああ、お身内同士で。なるほど。

安食

身内の方は、賛成してるわけじゃないですよ？

玉置

もちろんです。今もずっと説得していらっしやいます。

安食

つまり身内でも説得できないくらい、その意思は固いと？

玉置

まあ、結論から申し上げますと、はい……。

安食

(大きくため息をついて)まったく……意味がわからん……。

スイ

玉ちゃん。

玉置

はい？

スイ

私、結婚しないから。畑野さんにそう伝えてくれる？

玉置

……あ、わかりました。

葉子 いいの？

スィ もちろん。

葉子 ……そ。

玉置 （行こうとするが立ち止まって）あの、畑野さんが納得しない場合は、なんて応えればいいですかね？

スィ 「冷めちゃった」って。

玉置 冷めた？

スィ 畑野さんが熱すぎたからのぼせてただけです。「冷静になって考えたらもう冷めました」って伝えて。

葉子 え？別れるの？

スィ 別れるって言えるほど付き合ってもいないし。

葉子 結婚はアレかもしれないけど、お付き合いは続ければいいじゃない。

スィ 本当に冷めちゃったの。この子の言う通りよ。私も、お父さんに顔向けできない。お父さんが残してくれた遺産でここに住まわせてもらってるわけだし。

葉子 それはそうかもしれないけど……。

スィ お父さんのこと考えたら、畑野さんとお付き合いなんてできないの。

葉子 ……。

玉置 そう、伝えてきてくれる？

小寺 え、玉置さんが行くんじゃないんですか？

玉置 俺には無理だ。こんな、悲しいこと……。

小寺 ああ……わかりました……。

小寺は畑野の部屋へと去る。

安食 入居者同士の恋愛って、よくあることなんですかね。

玉置 まあ、世間の皆さんが思ってるよりは多いと思います。

安食 結婚なさるカップルも？

玉置 それはいらっしやらなかったです。私の知る限り。

安食 ですよ。

玉置 そこまで踏み切らないのが普通と言いますか……。

安食 そりやそうですよ。非常識ですよ。同じ部屋に住みたいだけの理由で、プロポーズだなんて。

玉置 まあまあまあ。

安食 こう言っちゃなんですよ、いい歳して見境がなさすぎる。

スイ ホントにごめんね。お母さんが悪かった。

安食 お袋に言っただけよ。俺は相手の男に言っただよ。

スイ 畑野さんを悪く思わないで。お願いだから。

安食 相手の男なんか庇うなよ。見てられないよ。

スイ ……。

どことなく悪い空気が漂う。

玉置 ……あの、ですね、これは、私の、個人的な意見と言いますか……勝手に思ってることなんですけど……。

安食 なんですか？

玉置 正直に申し上げて、今回のことに限らず恋愛絡みの揉め事やいざこざは多いんです。ですけど、私はほとんど恋愛はしたほうがいいと思って……誤解を恐れずに言えば、みなさん、人生を賭けた最後の恋愛だと思っただけじゃない。だからこそ熱くなったり、嫉妬したり、妬んだり恨んだり、時には、ストーカーになったり……。

安食 ストーカー？

玉置 そうならないように我々がいるんですけど。なんて言うか、恋愛してるみなさんはすごく元気なんです。良い所を見せようと張り切ったり、綺麗になろうとお洒落したり、恋していると認知症が改善していったりもして。

安食 認知症が？

玉置 ええ。みなさん入居した当初より、どんどんお若くなっていくように私には見えるんです。それこそスイさんも、どんどん輝いていったと言いますか……。

安食 ……。

玉置 あ、すみません。本題とはかけ離れたことを……。

スイ ううん。ありがとうね、玉ちゃん。

玉置 あ、いや。

葉子 恋愛してないあたしはみんなより老けてるってことだ？（笑）

玉置 そんなことないですよ。葉子さんは最初からお若かったですから。

安食 あの。今、ピンときたんですけど。

玉置 え？ピンときた。

安食 ええ。お相手の方、認知症なんじゃないですか？

玉置 認知症？！

安食 そう考えるならまだ合点がいきます。プロポーズしたのだからってそうだし、夜這いのことにしたって、

葉子 え、夜這い？え、夜這いつてなによ？

安食 夜中に足の裏舐められたって、母が。

スイ だからそれは違うんだって。私が夢でも見たのよ。

安食 部屋に居られないほど怖い目に合ったんだらう？夢で済む話かよ。

ここへ小寺が結衣を連れてやってくる。

皆の注目が自然と集まり……。

小寺 あれ、あの、畑野さんの娘さんが、ご挨拶したいって。

結衣 初めまして。娘の結衣と申します。

安食 安食です、どうも。

結衣 この度は父が、とても無責任なことを申し上げまして……（頭を下げ）
ご迷惑をおかけいたしました。

安食 いえ……。

スイ 謝らないでください。私にも責任がありますから。

結衣 本当に、申し訳ありません。

スイ こちらこそ、すみません……。

互いに頭を下げるスイと結衣。その謝罪が終わらない。

玉置 （終わらせようと）まあまあまあ。 （小寺に）あれ、畑野さんは？
小寺 スイさんの気持ちをお伝えしたら、ひどく落ち込んでいらっしやっ

……。今、稲尾さんが慰めてくれます。

玉置 稲尾さんが？

小寺 ええ。

玉置 どこまでいい人なんだろうな、あの人は……。

結衣 こちらからご迷惑おかけしてなんですけど、お断りいただいて本当にありがとうございました。

スィ いいえ。私も曖昧な返事をしてしまつて、こんなことに……。

結衣 ウチは四人兄弟なんですけど、全員娘で。しかも四姉妹みんな若いうちに嫁いだもんですから。

スィ 伺つてます。お母さまも娘さんたちが嫁いだのを見送るように、早くに亡くなつたつて……。

結衣 ええ。それからはずつと一人で。会社やつたときはいいんですけど、人に預けてからはみるみる元気がなくなつて……ここに入居してから昔みたいな元気な父に戻つてくれたんで、私たちも喜んでたんです。

スィ そうですか。

結衣 スィさんの話は実は父から聞いていました。最初は驚きましたけど、父があまりにも嬉しそうに話すんですよ。ですから私たちも父の自由にさせてあげようつて話してて……ほんと父は真つ直ぐで、これだつて思うと突つ走つちやうもんですから。

スィ そうですよね（笑）。

結衣 父の暴走を止めていただいてありがとうございます。今は落ち込んでますけどすぐに立ち直ると思ひますので。どうか今後とも、よろしくお願ひします。

スィ ええ、こちらこそ。

安食 いや、あの。今後はないですよ。こんなことがあつたのに、母をここに置いていくわけないじゃないですか。

スィ ちよつと待つてよ。どういふことよ？

安食 家に帰るんだよ。当たり前だろ。

スィ 帰るつたつて母さんの居場所なんてないじゃない。泉ちゃんにだつて悪いわよ。

安食 だからつて置いて帰るわけにはいかないよ。また夜這いにでもあつたらどうすんだよ？

スィ だからそんなことないんだつてば。

結衣 ウチの父が夜這いしたっていうんですか？

安食 そんなことは言っておりません。

結衣 さつきおっしやってたじゃないですか。ウチの父が認知症なんじゃないかって。

安食 ……聞こえていたなら謝ります。でも私にしてみればそれが一番合点がいくんですよ。

結衣 父は認知症なんかじゃありません。

安食 でもそう考えるのが私にしてみれば辻褄が合うんです。

結衣 辻褄が合うんだか合点がいくんだか知りませんが、父に会って直接話していただければわかりますよ。

安食 とにかく母は連れて帰ります。これ以上、危ない目に合わせるわけにはいきませんので。

結衣 父がいつ危ない目に合わせたって言うんですか？！

スィ そうよ！失礼じゃないの！

結衣 父は本気でお母さんのことを愛してたんですよ？！

安食 その結果が夜這いですか？！プロポーズですか？！分別のある人間がすることじゃないでしょ？！

玉置 安食さん、畑野さんは認知症では、

安食 そんな人がいるところに母を置いていくわけじゃないじゃないですか！

玉置 まだ私が喋ってるんですけど、

結衣 だったらこっちも言わせてもらいますけどね、

玉置 言わないほうがいいんじゃないかな。

結衣 そちらが父をたぶらかしたんじゃないですか？

スィ 私が？！

玉置 それ見たことか。

安食 なんてお袋がそんなことしなくちゃならないんだよ？！

玉置 もうよししましょう。こんな不毛な争いは。

結衣 父の財産ですよ。妻になれば遺産を手にすることができますからね。

結衣 こっちはプロポーズを断ってんだらう！

結衣 内縁の妻でも同じですよ。遺言に口出せばいいんですから。

玉置 スィさんはそんなことは絶対に、

スィ そんなことは絶対にしません！遺産だって放棄してます！

玉置　そうです。畑野さんだつて認知症なんかじゃ、
うるさい！

結衣　ごめんなさい！

結衣　放棄したとしても遺産や財産の4分の1は法律で認められてしまうんです！父が亡くなつて「やつぱり欲しい」なんて言われたら、こっちは相続するしかないですよ！

安食　お袋がそんなことするわけないだろう！

結衣　父だつて夜這いなんてしませんよ！

玉置　ですからそれをさつきから――

葉子　もういい加減にしなよ！！！

あまりの声に皆、押し黙る。

そしていつの間にか聴衆の姿が。

酒やつまみを買つて帰つてきた八田と住夫、下手には幹彦とミツ、上手には原と茂美がこつそり覗いていた……。

葉子

あのね、スイちゃんと畑野さんはあんたたちが考えるよりずっとプラトニックな恋愛してんの！バカなことばかり言つてないで、黙つて見守つてあげりゃあいいのよ！

八田が目の前の揉め事をツマミに酒を飲み始める。

住夫　えっ？飲むの？ここで？

八田　部屋じゃ酒飲むの禁止なんだよ。

玉置　いや、あの、八田さん。今、取り込み中なんですけど……。

八田　わかつてるよ。だからここで飲むんじゃねえか。

玉置／住夫　いやいやいやいや。

八田　どうぞ。続けなよ。

玉置　いや八田さん。飲むなら食堂でお願いできませんかね？

八田　スイちゃんは遺産狙いで、畑野は夜這いか……こりやあ警察沙汰だな。タマキン、110番。

玉置　あ、ああ……。

安食 ……。

結衣 ……。

八田 さっさと警察に電話しろよ。

安食 (スイに) 行こう。帰ろう。

スイ 帰らない。

安食 お袋。

スイ 言ったでしょ？帰ったって私の居場所なんてないの。

安食 泉のことなら気にしなくていいよ。

スイ 気にするわよ。もう嫌味言われるのはごめんなの。

安食 ええ？嫌味？

スイ ……あなたには黙ってたけど、泉ちゃん、家のことはなんでもかんでも

自分でやりたい人でね、良かれと思つて手伝つても嫌味言われるし、手
伝わなかったら手伝わなかったで嫌味言われるし。結局あたしは邪魔
者でしかないのよ。

稲尾 (声) いいからほら！今行かないでどうすんだよ！

稲尾が畑野の手を無理やり引いて部屋のほうからやってくる。

畑野 ……。

稲尾 すみませんね。みなさんのお話が、部屋のほうまで聞こえてきたもんだ

から。ほら。畑野さん。

畑野 ……。

稲尾 息子さんね、畑野さんは認知症なんかじゃありませんよ。夜這いなんて

ことをする人でもない。この私が保証します。ほら。畑野さん。

畑野 ……。

稲尾 息子さんね、畑野さんは純粋な気持ちでお母さんのこと好いていた

けなんです。間近で見ていたこの私が保証します。ほら。畑野さん。

畑野 ……。

稲尾 息子さんね、私が喋ってばかりで申し訳ないんだけど、もう少しだけ

待つてほしいんだ。畑野さんは何かしら喋るはずだから。この私が保証

します。ほら。畑野さん。スイちゃんに何か言つてやりなよ。

畑野 ……僕が、ここを出ていきますので。

スイ えっ……。

畑野 僕がいたらご迷惑になりますから。スイさんは今まで通り、ここにいてください。

稲尾 なに言ってるんだよ。女心がわからない人だね、ったく。「気持ち冷めちまった」なんて嘘に決まってるだろう。ご家族を気使ってるのがあんたわかんないのかい？

畑野 ……。

スイ ……。

安食 (スイの手を引き) 行こう。

茂美 (立ちほだかり) 待ちなさい。まだ話は終わってないでしょ。退いてください。

安食はスイの手を引いたまま、茂美を強引に交わして去る。

茂美 ちよつと！

追いかける茂美。付いていく原。

結衣 ……お父さんいいの？追いかけて。

畑野 ……お前、スイさんをそういう目で見たのか？

結衣 ……。

畑野 だから結婚に反対したのか？

結衣 ……あのさ、別に付き合う分にはあたしたちだって構わないと思っただよ。でも結婚となったら相続のこととかいろいろ考えなきゃならないでしょう？ウチらみんな嫁いでるんだし、再婚なんかされたらこっちの立場がどう！

畑野 もういい！帰れ！

結衣 ……。

畑野 お前とはもう口も利きたくない。帰れ！

結衣 ……お父さんも頭冷やしたほうがいいよ。頭冷やせば、自分がどれだけバカなことしようとしてたかがわかるから。

畑野 ……。

結衣はそう言い残し、玄関へと去る。

沈黙……。

突然、パシャリとスマホカメラの音。撮っていたのは住夫だ。

皆 ？？

住夫 飲みませんか？なんだかよくわかりませんが、こういうときは。

八田 妙案だ。さすがは俺の息子だよ。

住夫 僕、お酒買ってきますんで。

八田 畑野。飲むぞ。お前たちも付き合え。

稲尾、幹彦、ミツが返事して、

八田 食堂行こう。こっちよりは広いから。

住夫 了解。

買ってきた酒とツマミを手に、八田と住夫は食堂へ。

幹彦とミツがそれに続く。

稲尾は畑野の肩に優しく手を置くと、肩を組んで食堂へ。

すると玉置が小上がりにへたり込んで、

玉置 だあー……やばい……人生で一番疲れたかも……。

小寺 お疲れさまです。

葉子 お疲れさまって玉ちゃんほとんど何もしてないけどね（笑）。

玉置 何にもできないですよ、あんなの。

ここへ花代が帰宅して来る。

葉子 あ、おかえりなさい。

小寺 おかえりなさい。

花代 花代 いただきます。（残されたお茶を見つけて）ちょっと誰？お茶片付けてないの。

葉子 ごめんなさい。さっきまでちょっとお客さん来てて。(片付けよう)
小寺 (それを制して) 私やりますよ。

葉子 あ。ありがと。

花代 デラちゃん、メガネ変えた？

小寺 ああ、はい。変えました。

花代 なんかさあ、どンドン似てきてない？玉ちゃんと。

小寺 そうですか？

花代 髪型まで一緒だし。

小寺 なんかに似てくるんですかねえ？長いこと一緒にいると。

花代 そんな飼い主とペットじゃないんだからさ。

玉置 俺、片付けるよ。

小寺 いや私やりますよ。

玉置 いいいい。俺、今から報告書書くからさ、みなさんのほう頼むわ。

玉置は使い終わったコップを籠に入れて、下手を去る。

葉子 ……匂わせっていうんでしょ？

小寺 匂わせ？

葉子 「私と玉置さんはお付き合いしてます」みたいな。

小寺 ええ？なんですか、それ。

葉子 惚けなくていいから。この人たちみんな知ってるよ。大人がすることだと思っ、みんな黙ってるだけで。

小寺 ……やっぱりバレてます？

花代 バレバレだよ。どんどん似てくるっていうか、同一人物なもの。

葉子 いや同一人物ではないでしょ(笑)。

小寺 なんか私、好きになるとその人そのものになりたくなっちゃうんですよね。好きなアニメキャラのコスプレするのと一緒で。

花代 ちよつとなに言ってるかわかんないんだけどさ、玉ちゃん、奥さんと別れる気あるの？

小寺 てか、そこは私が求めてないんですよ。向こうの家庭を壊す気はないというか。

花代 よくないよ。そんな、昭和の不倫は。

小寺 いや、そういうことではなくて。シンプルに、私みたいな人間が推しの邪魔をしたくないというか、推しが悲しむところを見たくないんです。そんなの、いつか捨てられるのがオチじゃないのさ。

小寺 そもそも捨てられるという概念がないんですよ。世界線が交わったのが奇跡というか、交わらなくなったとしても推しは推しなので。なに言ってるか、わかる？

花代 わかるような、わからないような。

葉子 あたしは全然わからないわ。

花代 「別れても好きな人」みたいなことでしょ？

葉子 あー懐かしいね。「別れても好きな人」。(歌い出す) 別れた人に

小寺 全然違いますね。別れるっていう概念もないんで。

葉子 そうなの？

小寺 私に選択権なんてなにもないんです。推しが幸せであればそれでいいし、それが私の幸せなので。

葉子 花代さん。あたしも全然わかんなかったわ。

花代 ……まあ、いろんな考え方があって全然いいんだけどさ、なんだかんだ理由つけて、傷つかないようにしてるだけだと思っただけね、あたしは。

葉子 いずれにせよ、若いうちだからこそ言えることよね。

小寺 そうですか？

葉子 あたしもさ、まあデラちゃんとはだいぶ違うけど、ずーっと2号さんの人生で。

小寺 2号さん？

葉子 二番目の女ね。それを好んで選んだの。

小寺 好んでって？どうしてです？

葉子 仕事柄、彼氏作れば焼き餅妬かれるだけだし、結婚したってバブル崩壊みたいなことがあったら目も当てられないでしょ？二番目でいたほうが確実にお金落としてくれるしさ、何人も掛け持ちできるしね。

花代 ずいぶんと打算的だね。

葉子 それでいいと思ってたんですよ。それでいいと思ってたんですけど、気がついたら独りだった。

花代 ……。

葉子 あたしのこと誰が看取ってくれるんだろうって思ったら急に不安に

なっっちゃって……それでここ入居することにしたの。

小寺 大丈夫ですよ。私たちがちゃんといるんで。

葉子 ありがとう……てか、なんでこんな話してんだろう？スイちゃんたちに感化されたのかな？（笑）

小寺 ですかね（笑）。

葉子 だからね、デラちゃん。一番目にいるのはあんまりおすすめしないよ。

小寺 大丈夫です。推しと彼氏は全く別物なので。

葉子 そうなの？

小寺 ええ。3年付き合ってる彼氏もいますし。

葉子 ……そうなの？！

小寺 そうですよ。

花代 ……なんか頭痛くなってきた。

小寺 え、大丈夫ですか？お熱測ります？

花代 大丈夫大丈夫。そういうことじゃないから。てか仕事戻りなよ。あたしたちと、いつまでもくっちゃべってないで。

小寺 ああ、はい。すみません。じゃあ……。

と、小寺は仕事へと戻る。

葉子 ほんと、わかんないですね、最近の子は。

花代 宇宙人だよ。あたしからしたら。

少し間。

葉子 八田さんに「結婚したことない奴は無責任な人間だ」ってよく言ってるじゃないですか。

花代 ああ。

葉子 あたし、あれ聞かされたときに、グサグサ響いてました（笑）。

花代 結婚したらいいじゃないか。八田さんと。

葉子 ええ？

花代 初婚同士で、ちょうどいいじゃないの。

葉子 ええ？なんでですか？

花代 なんですすかかって……だって、そういうことだろ？

葉子 ………。

花代 看取ってもらえばいいじゃないの、八田さんに。

葉子 ………。

花代 順番で行ったら八田さんのほうが先だけどさ、あの人、しぶといだろうからね。

葉子 ……八田さんはだって、花代さんのほうばかり見てるじゃないですか。

花代 なに言ってるんだよ。そんなわけないでしょ。

葉子 花代さん。男性経験少ないでしょう？

花代 だったらなんだよ？

葉子 全然見る目ないですよ、八田さんのこと。

花代 (身体に異変) ………。

葉子 いいんです。あたしは、二番目の女で。

花代 ………。

葉子 さて。あたしも飲んでこようかな。

葉子は食堂のほうへと去る。

ひとり残った花代、心臓をおもむろに叩く。

花代 ………。

胸が痛んでいるのか、だんだんと激しく叩く……。

花代 ………！

しばらくして痛みが治ったのか、心臓を抑え、大きく深呼吸。

そこへ買い物から帰宅してくる弓枝。

花代 ああ。おかえり。

弓枝 ただいまです。(荷物を置いて) ああ！疲れた！

花代 まだカート買ってないの？

弓枝 ええ。花代さんみたいな可愛らしいカートが見当たらなくて。

花代 あたしのあげようか？

弓枝 ええ？いいんですか？

花代 いいよ。(カートを弓枝に) はい、どうぞ。

弓枝 新しいカートでも買ったんですか？

花代 ううん。もうカートは必要ないからさ。

弓枝 え？必要ない？

花代 うん。

弓枝 え？どうしてです？

花代 ……弓枝ちゃんさ、前にあたしと八田さんが前世で繋がってるみたいな話してたでしょう？

弓枝 ええ……。

花代 それってどういうこと？前世があるってことは、来世もあるって話？

弓枝 そうですね。命はいつか尽きますけど、魂は永遠に生き続けますから。

花代 ああ、魂がね。

弓枝 前世までに養った魂の因果によって花代さんと八田さんは出会った。

花代 これを運命っていうんです。

弓枝 気持ち悪。

花代 仕方ないですよ(笑)。運命には抗えませんかから。

弓枝 じゃあまた来世も出会うっていうの？

花代 それはわかりません。来世と言っても必ず人間になるわけじゃないんです。

弓枝 魂は何にでも宿ります。動物はもちろん、花や木、このカートや

花代 この椅子や、ビルやパソコンにも。

弓枝 パソコンにも？へえ。

花代 仮想現実にも宿るんですよ。今アバターやメタバースなんて言われて

弓枝 ますけど、もはやバーチャルではなく本物の世界です。

花代 ちよつとなに言ってるかわかんないけど。

弓枝 難しいですよ(笑)。つまり私たちが見てるのは人間の世界なんです。

花代 人間が生まれる前は自然の世界があり、自然の前には宇宙の世界があ

弓枝 ってこれからメタバースの世界がある。魂はその世界線を自由に行き

花代 来できるんです。宇宙や自然の世界から見れば、私たちはまだまだ若者

弓枝 で、ひよっこなんー

花代 (遮って)要するに、私の魂はずーっと生き続けるってことだ？今も、これからも。

弓枝 そうです。これからなんです。私たちはいつでも。

花代 ……なるほどね。

弓枝 (見せて)このネックレスにね、亡くなった夫の魂が宿ってるんですよ。

花代 ああ、そうなの……？

弓枝 夫が亡くなって、私ひどく落ち込んでいたんですけど、

花代 (興味ない)ああ、そうなの。

弓枝 先生が夫の魂を呼び寄せてくれて、ここに宿してくれて。

花代 (同じく)ああ、そうなの。

弓枝 ずっとそばにいてくれると思ったら、すごく救われたんです。

花代 (同じく)弓枝ちゃんさ、おせんべい買ってきたんだけど食べる？

ここへ原と茂美が戻ってきて、

茂美 花代さん。

花代 ん？なに？

茂美 え、聞こえませんでした？駐車場から花代さんのこと呼んでたんですけど。

花代 ごめんごめん。なに？どうしたの？

茂美 今、スイちゃんか息子さんに連れていかれちゃって。

花代 連れて行かれた？

茂美 例の、畑野さんの件で。

花代 あー。そりゃあ仕方ないわよ。

茂美 仕方ない？

花代 結婚なんて言われたら心配するでしょう。ご家族とちゃんと話すべきだと思うよ。

茂美 いやまあ、それはそうなんですけど……。

ここへ住夫が食堂のほうからやってくる。

住夫 あ、こんにちは。

弓枝　こんにちは。
花代　ああ、どうも。
住夫　あれ、もし良かったら一緒にしませんか？今、父とかみなさんと食堂で飲んでるんですけど。
弓枝　ごめんなさい。花代さん、八田さんと仲悪くて。
住夫　えっ？！
花代　ちよつと弓枝ちゃん。
弓枝　でも安心してください。それってとっても仲がいいってことですから。
花代　なに言ってるの。
弓枝　お互いがお互いを想うからこそ仲が悪く見えているだけです。二人は魂で繋がっています。見ていればわかりますから。
住夫　ああ、そうなんですか……？
弓枝　はい。
住夫　でも今、一緒に飲んだりは……？
弓枝　（即座に）しません。
住夫　ですよね。（原と茂美に）あの、もし良かったら……。
茂美　（原と目配せし）ああ、じゃあ……。
住夫　今、お酒とか買ってきますので。（行こうとする）
原　（ので）あ、私が行ってきますよ。
住夫　大丈夫です。父からお金を預かっているの。
花代　あの。
住夫　（立ち止まり）はい？
花代　ちよつと、厚かましいことを伺っていいですか？
住夫　え？なんですか？
花代　八田さん、一度も結婚したことないって聞いてるんですけど、どうして息子さんがいらっしゃるんです？
住夫　ああ……。
花代　答えたくなければ、答えなくても結構ですから。
住夫　いや、そういうわけじゃないんですけど……父の家系が、代々続く会社を営んでたんですが、ご存知ですか？
花代　八田貿易でしょ？あたしらの世代じゃ有名な会社ですよ。
住夫　それで、父が会社を継ぐときに、ちよつと僕を授かって、母と結婚する

って話になったらしくて。そしたら当時の社長だった祖父が、興信所を使って母を調べたみたいなんです。

茂美 ああ、なるほど……。

原 昔はよくあったよね、そういうこと。

住夫 まあそれで、八田家に母の家はそぐわないってことで破談になって、父も八田家とは縁を切ったという……。

弓枝 悲恋だったんですね、お母さまと八田さん……。

花代 お父さんから聞いたんですか？その話。

住夫 そうです。

花代 お母さんは？なんて？

住夫 母は父のことはなにも話さなかったんです。亡くなる間際に、ようやく父の名前を覚えてくれたくらいで……。

花代 ちよっと出来過ぎてやしませんか？あの人、八田家と縁なんか切っていないでしょう？

住夫 ……そうなんですよね。実は僕も、そう思っていて……会社に電話したら父がここにいることをすぐ教えてくれましたし、縁を切ったなら、母の元に来て一緒に暮らすこともできたんじゃないかなって……。

花代 あなたに会いに来たりとかは？

住夫 一度もないですね。

花代 やっぱりね。お母さんが話をしなかったのは、いい思い出じゃなかったからですよ。きっと火遊びかなんかだったんじゃないですか。

原 いやいや、花代さん。

花代 え？原ちゃんもそう思わない？正直に言ってごらんよ。

原 (テンパって) いや、僕はなにも言えませんよ。

花代 原ちゃん。それ、言ってるのと同じだよ。

原 およよおよよおよよ。

花代 お父さんにはつきり聞いてみたらどうですか？

住夫 まだ、そこまでの関係じゃないと言いますか……。

花代 この際だから言わせてもらいますけどね、あなたのお父さんはどうしようもない人ですよ。入居してくる女の人を片っ端から口説いてるし、賭け麻雀は勝つまで続けるし、タバコもそこら中で吸うしね。あたしはね、そんなあいつを本気で正してやりたいんだ。あたしの人生を賭けて。

弓枝 M ね？仲良いでしょう？（笑）

住夫 （困って）ああ……。

花代 そう思ってたんですけどね、もう諦めました。あとは、息子さんに託します。

住夫 え、僕ですか？

花代 やっぱりね、最終的にはご家族ですよ。ご家族が言ってあげるのが一番ですから。

住夫 なんかすみません。父がずいぶんご迷惑かけたみたいで……。

花代 本当にいい迷惑ですよ。でもね、感謝してる部分もあるんです。

住夫 感謝ですか？

花代 あたしね、夫と入居したんですよ、ここに。夫に先立たれて、これからどう生きていこうかってときに八田さんが入ってきて。まあ初日から風紀を乱しまくるもんだからあたし頭に来てね、毎日毎日ケンカしたら、いつの間にか元気になってる自分に気づいてね……八田さんに頭下げさせるのが生き甲斐になっちゃったんですよ。本人には絶対に言いませんけどね。

茂美 どうしたんですか？なんか今日、変じゃないですか？

花代 そうだよね、変だよね（笑）。

そう言うとき花代はおもむろに部屋のほうへと帰っていく。

花代の背中を目線で追いつつ、弓枝のモノローグ。

弓枝 M 数日後、玉置さんから「花代さんが退居する」という発表がありました。

詳しい病名はわかりませんでした。花代さんは延命治療をせず、息子さん夫婦の元で暮らすことにしたそうです。

花代が去る。

モノローグの間、茂美と原、住夫も姿を消す。

弓枝 M そんなある日の夜、私が自分の部屋で眠っていると足の裏に温かな感触がありました。どんどん底なし沼にハマっていく感じがした私が目を覚ますと……。

弓枝は何かを発見し、思わず叫ぶ。

弓枝 キャー……！！誰か！！誰か！！

そこへ玉置と小寺が上手から、畑野、稲尾、葉子、ミツが下手から慌ててやってくる。葉子とミツは弓への元へ。

玉置 どうしました？！

葉子 どうしたの？！大丈夫？！

弓枝 ……部屋に誰かが忍び込んできて……（指して）今、そこに……！！
小寺 ええ？

小寺が部屋の明かりをつける。すると柵の後ろに気配が……。

小寺 ……誰？

返事は来ず……。

小寺 玉置さん。（見えてきて）

玉置 （無理無理無理）……武器なんか持ってくる。

小寺 ちよつと！

玉置が去ってしまう。

畑野と稲尾は目くばせして、柵の周辺を囲う。

緊張感が漂う中……。

稲尾 ……。（何か言おうと）

畑野 逃げようとしても無駄だ。お前は完全に包囲されている。

稲尾 ……。（何か言おうと）

畑野 どうせお前は捕まるんだ。ここには防犯カメラが至る所にあるからな。

稲尾 ……。（何か言おうと）

畑野

大人しく出てこい！でないとこっちから捕まえに行くぞ！

少しして棚の後ろから姿を現す。
……幹彦だ。

稲尾

（「幹彦……」と言おうとする）

畑野

幹彦さん？！

葉子

幹彦くん……。

小寺

え？なにしてるんですか？幹彦さん。

幹彦

……。

小寺

弓枝さんの部屋で、一体なにしてたんですか？！

幹彦

……。

ミツ

……大丈夫？覚えてる？自分のしたこと。

幹彦

……おミツちゃん……。

ミツ

ん？

幹彦

……おミツちゃん。

ミツ

覚えてない？

幹彦

（皆の顔をぼんやりと見て）……。

ミツ

もしかしてわかんない？今の状況が。

幹彦

……。

葉子

え、なに？どうしたの？どういうこと？

ミツ

幹彦くん、最近、なに話したとか、なに食べたとか、覚えてないことが

よくあつて……。

葉子

うそ。え、麻雀してるときは全然平気だよ。

ミツ

麻雀やつてるときは平気なの。ねえ？

稲尾

うん。昨日も、スイちゃんいないの忘れてて、俺のどこ来て「浅草行け」

幹彦

つて。

幹彦

そうだよ。スイちゃんどこ行つたんだよ？稲ちゃん、行けよ、浅草。今

稲尾

行かないでどうすんだよ？

幹彦

大丈夫なんだよ。浅草には行かなくて。

稲尾

どうして？

稲尾

畑野さん、いるだろ？ここに。もう帰ってきたんだよ。

幹彦 (畑野を見て) ああ、ホントだ。畑野さん、帰ってきたのか。

畑野 ……幹彦さん……。

ミツ (弓枝に) 怖かったよね? ごめんね。でも幹彦くん、悪気があってしたわけじゃないってどうか、なんて言ったらいいか難しいんだけど……。

弓枝 ごめんなさい。ちよつと今…… (理解が追いつかない)。

ミツ そうだよね、ごめんね。

葉子 とりあえず一旦部屋戻ろうか? ね? デラちゃん、いい?

小寺 はい。

葉子と小寺が弓枝を支えるようにして去る。

ミツ ちよつといい? 幹彦くんと二人にしてもらって。

稲尾 別に、いいけど……。

ミツ 大丈夫。なんかあつたら、大声出すから。

稲尾 うん。わかった……。

畑野と稲尾は二人を残して去る。

ミツ ……幹彦くんさ、麻雀好きじゃん?

幹彦 うん。

ミツ 足の裏を舐めるのも好きじゃん?

幹彦 あ? なに言ってるんだよ? そんな臭えもん、舐めるわけないだろ。

ミツ 麻雀と足の裏舐めるのどっちが好き?

幹彦 何と何を比べてんだよ。

ミツ どっち?

幹彦 麻雀に決まってるだろう。

ミツ あたしはね、足の裏を舐められるほうが好き。

幹彦 はあ?

ミツ 麻雀はよくわからないし。足の裏を舐められるほうが断然いい。

幹彦 何だがよくわかんないこと言ってるなあ、さっきから。

ミツが部屋の明かりを消す。

そして小上がりに上がると、自らの足を幹彦に差し出し、

ミツ ……舐めてよ。

幹彦 ええ？やだよ。

ミツ 大丈夫だよ。お風呂入ったから。

幹彦 そういう問題じゃなくて。

ミツ 足の裏舐めたくなったら、私の舐めればいいんだよ。

幹彦 ……。

ミツ 大丈夫だよ。私、舐められるの大好きだから。

幹彦 ……。

幹彦はミツの足をじっと見つめると、優しく手を触れ、

幹彦 ……。

ミツ ……。

幹彦はミツの足にしゃぶりつく。

ミツはそれが嫌ではなさそうな雰囲気……。

そこへゴルフクラブやらプラスチックバットやらホウキなどの武器を手にした玉置が戻っている。

幹彦とミツの情事を目の当たりにして、

玉置 ……え……えつ……。

溶暗……。

数日後。

花代の退居当日。日中。

住夫が椅子に座っている。

手作りの花をあしらったカートを2台引きながら原と茂美が
登場。

茂美 どうしようか？

原 いいんじゃない？ひとまずそこ（小上がり）に置いとけば。

茂美 そうね。

原が2台のカートを小上がりに乗せる。

茂美 こっちに向けて。

原が装飾花のある面を、茂美のほうに向ける。

茂美 （じっくり見て）いいね。なんかここに花が咲いてるように見えない？

原 （見て）あー確かに。

茂美褒めてよ。

原褒める？

茂美 いい子いい子してよ。私のアイデアなんだから。

原 ……（仕方なく頭を撫でて）いい子いい子……。

住夫 （スマホで写真を撮る）

原 はああ！！こ、こんにちは！いらっしやっただんですね……。

住夫 はい、いました、ずっと。

茂美 （原を叩いて）もうやだ！恥ずかしい！（住夫に）すみません。

住夫 いえ（笑）。

茂美 それ（カートを）裏返しといてね。

原 あ、うん。

茂美は先に下手へと戻る。

原は装飾花を隠すように裏返す。

住夫 大変ですね。

原 はい？

住夫 いや奥さん。父から聞いてます（笑）。

原 いや、あの、あれ、あんまり、ちよつと、これ（静かに）で、あの、父も言っちゃったけど、はっきり言っちゃったほうがいいと思いますよ、僕も。

原 いや、あの、ちよつと、

住夫 大丈夫ですって。はっきり言ったところで別れる奥さんじゃないですよ。それだけ原さんのことを好きはずです。

原 それは、あの、そうかもしれないけど、いや、どうだろう、ちよつと、

ここへスイが菓子折りを手にした安食とともに上手から登場。

原 あ、こんにちは！

スイ こんにちは。どうしたの？そんなに慌てて（笑）

原 スイちゃん！おかえりなさい。

スイ いただきます。

安食 （会釈して）どうも。先日はお騒がしまして……。

原 あ、いえ……。

安食 また母のこと、よろしくお願いします。

原 よかったです。何はともあれ、戻って来れて。

スイ 花代さん、今日引越すんでしょ？

原 そうなんだよね。あれ、もしよかったらスイちゃんも手伝って欲しいんだけど。

スイ 手伝う？

原はカートにあしらった花を見せて、

原 昨日のレクリエーションでね、みんなでこの花を作ったのね。

スイ わあ素敵。

原 それで花代さんの饞別にカートを送ることにしたんだけど、この花をカートにあしらって、全員お揃いにしたらどうかってことになって。

ス イ ええ？八田さんも作ったの？

原 (首を振り) 八田さんは「俺はいい」って……。

ス イ もう。こんなときまで……。

住 夫 なんか、すみません、父が(笑)。

ス イ わっ……いらしたんですか？

住 夫 あ、いました。さっきから、ずっと。

原 花代さん、そろそろ出発でさ、今急ピッチで花を作ってるところなんだけど、

ここへカートを引いた畑野と稲尾がやってくる。

稲 尾 スイちゃん。おかえり。

ス イ ただいま。

……。

畑 野 畑野さん。先日は大変無礼なことを申し上げました。(頭を下げ)この通りです。お許しください。

安 食 いえ。私もあれから頭を冷やしましてね、常軌を逸した行動だと反省しております。(頭を下げ)申し訳ありませんでした。

安 食 今後とも母のことをよろしくお願いします。

畑 野 まあ、ええ……。

ス イ ……。

畑野とスイは微妙な空気で……。

安食が菓子折りを畑野に差し出して、

安 食 これ、つまらないものなんですけど……。

畑 野 (遮るように)稲尾さん。スイさんに花の作り方、教えてあげたらどうですか？

稲 尾 畑野さんが教えてやったらいいじゃないか。

畑 野 僕は、花代さんの荷物を運ばなくちゃならないので。それじゃ。どうも。

カートを置き、そそくさと行ってしまおう畑野。

スイ ……。

稲尾 スイちゃん。今、花代さんにプレゼントするカートをこしらえててさ。

スイ うん、聞いた。原ちゃんから。

稲尾 もしよかったら俺が教えようか？この花の作り方。

スイ 大丈夫。原ちゃんに習うから。

稲尾 ……そうかい。

スイ 行こう。原ちゃん。

原 あ、うん。

ここへ菓子折りを手にした結衣が下手からやってくる。

結衣 ああ、こんにちは。

安食 あ、どうも。

結衣 今日、スイさんが戻っていらっしやるって父から聞いていたものから。

安食 それで、わざわざ？

結衣 ええ。先日の失礼を直接お詫びしないと、と思ひまして。あのときは頭に血が昇っていたものですから。本当に申し訳ありませんでした。

(軽く会釈)

スイ とんでもないです。私もお父さまが認知症だなんて、ご無礼を……。

結衣 いいえ。そう勘違いされても仕方ないことを父が致しましたので。

安食 こちらこそ大変失礼をいたしました。

結衣 ……あの、スイさん。父が、もうあんなバカなことと言わないと、約束してくれましたので……。

スイ そうですか……。

結衣 どうか父を許してあげてください。

スイ 許すも何も……本当に嬉しかったんですよ。年甲斐もなく心が踊ってね。お父さまには感謝しかないんです。

結衣 ありがとうございます。

スイ 今後はお友達として、お付き合いさせていただきます。

結衣 はい。今後ともよろしくお願いします。

スイ 原ちゃん。行こう。
原 うん。
安食 じゃあお袋。俺は、これで。
スイ うん。車ありがとうね。

スイと原は食堂へと去る。

安食 あの、さっきお父さまに（菓子折りを）渡しそびれちゃって……。
結衣 もう何やってんだろう。私も（菓子折りを）渡し忘れちゃった……。
安食 じゃあ、いいですか？お渡ししても。
結衣 じゃあ、いいですかね？私もそろそろ出なきゃいけないくて。
安食 じゃあ交換ということで（笑）。
結衣 はい（笑）。

安食と結衣は菓子折りを交換して、

安食 本当に申し訳ありませんでした。
結衣 こちらこそ申し訳ありませんでした。
稲尾 なあなあなあ。ちよつと待ちなさいよ。
安食／結衣 はい？
稲尾 一体何のための菓子折りだよ。畑野さんやスイちゃんに謝るための物
だろう？あんたたちで交換してどうするんだよ。

安食 ああ……。
結衣 はい……。
稲尾 いいよ。俺が渡しとくから。あんたたちもう帰りなよ。

稲尾は二人から菓子折りを奪うとそそくさと下手を去る。
突然叱られた安食と結衣は、戸惑い、苦笑い。

安食 それじゃあ私、仕事がありますので。
結衣 あの、安食さん。
安食 はい？

結衣 まだこの方たちには話してないんですけど、お母さまがここに帰る
って聞いて、父はここを出ていくことにしたんです。

安食 そうなんですか？

結衣 父もこのままじゃ気まずいって言うし、父が退居したほうがスイさん
やご家族も安心なさるだろうからって。今、次の施設を探してるところ
なんです。

安食 なんかすみません。お気を使わせてしまつて。

結衣 あ、いえいえ。

安食 うちも、あのまま母を置いてやればよかつたんですけどね、子育てと母
の面倒と、両方は見れないって妻に言われちゃいまして。

結衣 わかります。私も義理の母の面倒はなかなか。お互い、気遣いますしね。

安食 そちらは四姉妹でいらっしやいましたよね？

結衣 そうなんです。ですからウチも、父とは誰も暮らしてあげられなくて。

安食 うーん……。

住夫 難しい問題ですね（笑）。

結衣 えっ?! あ、いらしたんですか？

住夫 あ、いました。さっきから、ずっと。

結衣 ああ、そうですか……。

住夫 あの、僕ってそんなに影が薄いですかね？

結衣 はい？

住夫のスマホにLINEの通知音。

住夫 あ、いや、何でもないです。（と携帯を見る）

安食 あの、ここまでは何でいらしてるんですか？

結衣 バスですけど。

安食 よかつたら車で話しませんか？私、駅までお送りするので。

結衣 え、いいんですか？そんな甘えちゃって。

安食 もちろんです。私もお話を伺いたいので。

結衣 じゃあお願いします。（住夫に）あの、さっきした話はまだ内密にして
いただきたいと思いますけど。

住夫 あ。ああ。わかりました。

「それじゃあ」と住夫に会釈すると、安食と結衣は去る。

住夫は二人が行ったのを確認すると、携帯で電話をかける。

住夫

あ、もしもし。お待たせしてすみません……いや逃げたわけじゃないんですよ。まだ父と会えてなくて……いやなんか、ご老人が一人引越すみたいなんですけど、今から見送りとか――

ここへ八田が下手からやってくる。

住夫

(気づいて) あ、あの、今(来ました)。はい。失礼します。

住夫は電話を切る。

八田

悪いな。待たせて。

住夫

ううん。どうしたの？花代さんの花でも作ってた？

八田

なんで知ってんだよ？

住夫

え、本当に作ったの？

八田

無理やりな。葉子のやつにブチギレられてよ。

住夫

ああ、そうなんだ。

八田

手が震えちやって針に糸通すだけでも一苦労だよ。みんながそれ見て笑うからさ、「バカヤロウ、こっちは何年酒飲んでると思ってるんだ」って――

住夫

あ、ごめん。今日あんまり時間がなくてさ。申し訳ないんだけど。

八田

……そうか。

八田はポケットに入れていた封筒を住夫に差し出す。

なかなかの分厚さ。どうやら札束のようだ。

住夫はそれを受け取り、即座に鞆にしまいながら、

住夫

ありがとう。ごめんね。

八田

それで全部か？

住夫 うん、そう。

八田 全部返し終わるんだな？

住夫 うん、ありがとうね。ほんと。

八田 じゃあそれが手切れ金だ。もうここには来るな。

住夫 ……えっ？来るなって？

八田 次また来たって、なんだかんだ理由つけて金集るだけだろ？

住夫 ……。

八田 まあ俺にも引け目があるしさ、詫びのつもりで金渡してたけど、それで全部チャラな。

住夫 ……。

八田 最初は会えて嬉しかったけどよ、金集りに来ただけかと思ったらお前と飲む酒が不味くてしょうがなかったよ。

住夫 ……俺ってさ、影が薄いでしょ？

八田 あ？

住夫 父さんの中で。影の薄い存在だったでしょう？

八田 何が言いたいんだよ？

住夫 話してみてわかったよ。自分中心で身勝手に、俺や母さんのことなんか何にも考えてこなかったんだらうなって。

八田 ……。

住夫 母さんが何も言わなかったからさ、ワンチャン、止むに止まれぬ事情があったとかちよつとは期待したんだけどね、やっぱり期待外れだった。お前の期待には応えてやっただろ。金はやったんだから。

住夫 なんだよ、その言い方…誰のせいでこんなことになったと思っただよ？！

八田 俺に捨てられたせいだって言うのか？あ？てめえガキかよ？40（歳）過ぎて甘えたこと言ってるじゃねえぞ。

住夫はブチギレながら、鞆の中に手を入れ、包丁でも出しそう
な雰囲気。

八田の表情が強張る…。

住夫 ……。

八田 ……………。

ここへ花代の引越しの荷物を手にした玉置、小寺、畑野が部屋のほうから玄関のほうへと通過。

すると住夫は鞆からタオルを出し、「あつつい」と汗を拭う。八田の緊張が緩んだところへ、花代がやってくる3人に、

花代 じゃあよろしくね。

「了解です」などと応え、下手へと去る三人。

花代 (八田に) なんだよ？あたしの見送りにでも来たのか？

八田 んなわけねえだろ。住夫と話してたんだよ。

花代 ああいたの。あんた。

住夫 ……………。

八田 本当に影薄いのな、お前(笑)。

住夫 ……あの。前に父がどうしようもない男だって言ってたじゃないですか。

八田 ああ？

花代 ああ、言ったね。

八田 てめえ余計なこと吹き込んでんじゃねえぞ。

住夫 おっしゃる通りでした。父は本当にどうしようもない人間でした。僕はもう父の面倒を見る気がありません。金輪際、会うこともありません。ワンチャンもあります。本日もちまして、父とは縁を切ります。今までどうもありがとうございました。さようなら。

住夫は温度なく、早口に伝えると、鞆を手にそそくさと去る。

八田 ……………。

花代 ……何かあったの？

八田 お前が余計なこと言うからだろ。

花代 あたしはあんたの素行の悪さを話したまでさ。

八田 ……あいつからじゃねえよ。俺から縁を切ったんだよ。
花代 どうして？

八田 俺ももう長くないからな。住夫のこと捨てといて、俺が面倒見てもらう
わけにはいかないだろう。

花代 なに格好つけてんだよ。たった今、捨てられたくせに。
八田 うるせえ（行こうとする）。

花代 （ので）八田さん。

八田 （立ち止まり）あ？

花代 今までお世話になりました。ありがとうございました。

八田 ……おう。

花代 「おう」じゃないでしょうよ。あんたもなんか言いなさいよ。

八田 何にもねえよ。言いたいことなんて。

花代 「お世話になりました」でいいじゃないか。

八田 お前に世話になんかなくてねえよ。

花代 あたしだって世話になんかなくていいよ！でも言うんだよ、こう
いうときは！

八田 なんでだよ！やだよ！世話になったことなんかねえもん！

花代 ホント常識ってもんがないよね、あんたには！

八田 何の常識だよ、バカヤロウ！

花代 最後だからだよ！別れの挨拶でしょうが！

八田 ……知るかよ！関係あるか、そんなもん！

八田は不機嫌に下手を去っていく。

花代 ……。

少しして八田の「痛えな、離せよ」と声がする。

八田の首根っこを捕まえた葉子がカートを引きながら登場。

葉子 ほら。お見送りすんよ、ちゃんと。

八田 ……。

葉子と八田に続いて、入居者たち全員がカートを引いて登場。
玉置、小寺、畑野も戻ってくる。

花代 え？なに？どうしたのさ？みんなでカートなんか持って……。

茂美 いやね、花代さんに私たちからプレゼントがあつて……（花代に見せて）
ジャーン！！

花代 やっぱりカートなんだね。

弓枝 花代さん、私にカートくれたじゃないですか。だからみんなで、手作りのカートをプレゼントしたらいいんじゃないかっていう、

茂美 （重ねて）かつてっていうアイデアをあたしが思いついたんです。ね？

原 あ、うん……。

花代 手作りって？

茂美 この花。一個一個みんなの手作りなんですよ。

花代 へえそうなの！嬉しいね、それは！

茂美 花代さんだけに花を手作りしようってあたしが思いついたんです。ね？

原 まあ、うん……。

茂美 それでこのカートをみんなお揃いで持つことにしたんですよ。せーの、
ジャンジャジャーン！！

茂美の号令で、八田以外の全員がカートの表面を見せる。

そこには花代のカート同様、手作りの花が装飾されていて、

花代 ……。

茂美 こうすれば花代さんとずっと繋がっていられるかなってあたしが思いついたんです。ね？

原 あのさ、茂美。ちよっと押しが強いよ。

茂美 はあ？

原 なんていうか、そんなに推しが強いと有り難みがなくなるっていうか。

花代が泣いている。

みな、それに気づいて……。

皆 ……。

花代 ありがとうね。みんな。ありがとう。

しんみりとした空気を打ち破るように、

葉子 茂美ちゃん。大事なこと言うの忘れてるよ。

茂美 え？なに？

葉子 (花代のカートの花を差し) この青い花ね、八田さんが作ったんですよ。
八田 いいよ。言うんじゃないよ。

葉子 裁縫なんかしたことないもんだから時間かかっちゃって。

花代 いや参ったね。涙が一気に引いていったわ。

八田 ああ？

花代 ほんとだ。この糸いつか解けるね。いつの間にか落っこどして無くすのがオチだわ。

八田 ほらみる。だから嫌だって言ったんだよ。

幹彦 花代さん。

花代 ン？どうした？

幹彦 花代さん。

花代 ン？なんだよ？幹彦くん。

幹彦 八田さんは、そんなに悪い人じゃないよ。

花代 そう？

幹彦 俺と、麻雀やってくれるんだよ。

花代 知ってるよ。

幹彦 何回も何回もやってくれるんだよ。

花代 それも知ってるよ。勝つまでやめてくれないんだろ？

稲尾 違うんだよ。八田さんは、幹彦の脳トレのためにやってくれてんのさ。

稲尾 麻雀はボケ防止に良いって言うからさ。

花代 ……。

稲尾 お金かけてるのも、アドレナリンが出るから脳に良いんじゃないかって。

幹彦 八田さんは悪い人じゃないんだよ。

ミツ
ごめんなさい。そういうことだつて知らなかったから、私が告げ口した
みたいになっちゃったんです……。

花代
……。

原
あの、花代さん。ベランダでタバコ吸ってたの、僕です。

皆
(驚きの声)

原
八田さんのせいじゃないんです。八田さんの部屋のベランダで、僕がタ
バコをもらって吸ってました。

花代
どうしてタバコなんか吸ったのさ？

茂美
え、なに？あたしが原因？！

原
後で話そう。今は八田さんの潔白を示すときだから。花代さん、ごめん
なさい。僕のせいなんです。

八田
謝れよ。

花代
……。

八田
ここ出て行く前に、ちゃんと俺に謝れよ。

玉置
まあまあまあ。八田さん。

花代
やなことだ。なんであなたに謝らなくちゃいけないんだよ。

八田
俺を犯人扱いしたじゃねえかよ！

花代
あんたが吸わせてんじゃないのさ！あんたも共犯と一緒にだよ！

玉置
まあまあまあ。

花代
第一タバコ吸うなら喫煙所行きやあいだろ！何をこそこそ吸ってる
んだよ？！

八田
茂美がストレスでタバコ吸ってたぞ？堂々となんか吸えるわけない
だろ！

茂美
やっぱりあたしのせいなんだ？！

花代
だからって部屋で吸っていいわけないだろ！

玉置
デラちゃん、頼む。

小寺
え？

八田
てめえがどこもかしこも禁煙にするからこういうことになってんだろ
うが！

玉置
そっちまで手が回らない。

茂美
ねえ！どういふことなのよ！（追いかける）

原
いや違うんだよ！いや違うないんだけど違うんだよ！（逃げて）

茂美 何が違うって言うのよ?! (追いかける)

小寺 まあまあまあ。 (二人を止めて)

花代 麻雀のことにしたってね、賭ける必要ないじゃないか!

玉置 まあまあまあ。

八田 アドレナリンが出て、脳にいいんだって言ってんだろ!

玉置 まあまあまあ。

花代 化学的根拠はどこにあるのさ! 聞いたことないよ、そんなの!

玉置 まあまあまあ。

花代 賭け麻雀は法律で禁止されてんだよ! 通報してやろうか!

玉置 まあまあ……。

八田 通報してみろよ! クソババア!

花代 ……。

花代が心臓を抑え、苦しそう……。

玉置 ……花代さん……?!

花代、倒れる。

みんなが一斉に花代の元へと駆け寄る。

八田が花代を抱き抱えて、

八田 花代! おい! 花代!

花代は動かさず……。

暗転。

明転すると、そこは「わかばのいえ」ではないどこか。
小上がりに座り、ぼーっとしている八田。

カートはキレイに並べられ、自然の中に花が咲いているよう。

八田

(動かず) ……。

そこはおそらく八田の個室。

そこへ花代に似た女と、住夫に似た男が現れる。

格好から察するに看護師のようだ。

二人は、八田の個室の前で立ち止まると、

女 ここ。八田さん。

男 (バインダーファイルに目を通し) はい。

女 私、妙に気に入られちゃってさ、担当変わってほしいのよ。

男 (ファイルを確認) えっと、徘徊ですか？

女 そう。隙見てすぐどっか行っちゃうの。

男 ああ……。

女 この前なんかバスで高島平のほうまで行っちゃって。たまたま首からシルバールパスぶら下げてたからよかったけど、なかったらウチらじゃ手に負えなかったよ。

男 それでテープですか。

女 そ。誰かがいると思って、話してくれるのよ。

男 でも、何で今どき……。(テープなの?)。

女 レコーダーの声だとダメなのよね。無視してすぐどっか言っちゃうの。

男 へえ。なんでだろ。

女 昔の人だからかね？よくわかんないけど。じゃ。お願い。

男 はい。

女 ベッドの脇に、デスクが置いてあるから。

女はテープを男に預けて、その場を去る。

男は部屋をノックし、八田の部屋へ。

男　こんにちは。
八田　（反応せず）……………。

男はデッキにテープを入れると再生ボタンを押す。ノイズ音。

男　それじゃあまた、お風呂のときにお声がけしますね。

八田　……あなた、住夫に似てるな。

男　住夫？

八田　……………。

男　住夫さんってどなたなんですか？

八田　……………。

男　それじゃあ、また来ますね。失礼します。

男が去ると、レコーダーに録音された女の声の流れる。

女　さて。今日は何のお話を聞いていきましょかね。

八田　なんだ。またあんたか。

女　ねえ八田さん。昨日は何のお話をしましたっけ？

八田　……………。

女　恋愛の話とかいかがです？恋バナしません？

八田　もうずいぶん古い話だけど、下宿してたことがあってさ。

女　八田さん、ずっとお独りでしたよね？

八田　昼間から酒飲んで、麻雀やって、女がいて、もう青春そのものでさ。

女　結婚しようと思った方はいらっしやらなかったんですか？

八田　面白かったんだよ。足の裏舐めに、夜這いする奴がいたり。

女　もしかして、おモテになったとか？

八田　三角関係が拗れた連中もいてさ。

女　モテすぎて、誰か一人に絞ることができなかったんじゃないですか？

八田　結局、お互いの親が入ってきて、破談になっちまったけどさ。

女　八田さん、笑顔がチャーミングですよね。

八田　そうなんだよ。笑顔がチャーミングな女もいて。

女　女性が放っておかなかったんですね、きっと。

八田 可愛かったんだけどな。会話が通じなくてよ。

女 初めて彼女が出来たのはおいくつですか？

八田 俺のことを好いてくれる女もいたらいいんだけど、

女 その中で一番の恋愛っていつの頃ですか？

八田 それ以外の気持ちに俺は気づかなくてさ。

女 忘れられない方がいらっしやるとか？だから結婚できなかったみたい
な？

八田 忘れられないねえ……まあ、一人、心臓に持病抱えた女がいてさ。

女 その方とはどうやって出会ったんですか？

八田 真面目っていうか口うるさい女でよ、もう毎日ケンカだよ。

女 第一印象はどんな感じだったんですか？

八田 毎日大家在、ケンカの仲裁に来てさ。

女 どちらの方から好きになったんですか？

八田 もう死んじまったから、そんなのわからねえよ。ただな、ケンカの決着
は来世でってことにしたんだよ。そう、あいつと約束したんだ。

八田の背後に、いつの間にか枯葉が散っている。

八田はぼんやりと遠くを見ている……。

八田 ……………。

背後には枯葉、周辺にはカートの花に包まれて……。

溶暗……。

おわり